

# 引退馬保護運動の展開

環境情報学部 4 年

71648384

宮原壱歩

## 要旨

本研究は、北海道の競走馬産業における引退馬保護運動を分析したものである。戦後形成された競走馬産業は、生産者保護を第一とした内国産馬保護政策や馬産業内の制度慣行の結果、特殊な産業構造を形成しながら発展していく。しかしながら、1990年代以降の外国産馬開放と競馬不況という二つの波に競走馬産業は耐えることができなかった。これをきっかけとして産業構造が変化すると同時に、これまで繰り広げられてきた競走馬に対する理不尽な処遇が内外に明らかにされたことで、問題意識を抱える当事者を生み出す。その運動の一つが養老牧場の設立であった。当事者達は馬産業の中で競走馬の処分に対して問題意識を持ち、競走馬を「経済動物」として認識するのではなく、かけがえのない存在として単独化していた。このように本研究は、当事者達の「単独化」が、引退馬保護運動を構成する一要素となる過程を明らかにしたものである。

## 目次

### 序論

1-1	主題	4
1-2	仮説	4
1-3	研究対象	4
1-4	研究手法	5
1-5	先行研究	5
1-5-1	日本の競走馬産業に関して	5
1-5-2	社会運動論研究における引退馬保護運動の立ち位置	6
1-5-3	経済動物である競走馬と「単独化」する引退馬	8

### 本論

第一章	競走馬産業の歴史的形成と国際化による産業構造の変化	10
1-1	競走馬産業の形成過程とその仕組み	10
1-2	国際化の進展	12
1-3	産業構造の変化と引退馬の出現	13
第二章	引退馬保護運動の現場 養老牧場に関して	17
2-1	養老牧場の概要	17
2-2	養老牧場の設立事例	18
	A 牧場の場合	19
	B 牧場の場合	20
	C 牧場の場合	21
2-3	運営状況	22
2-4	本章のまとめ	25
第三章	引退馬保護運動 当事者の語りから	26
3-1	問題意識の芽生え	26

3-2	共感 広がりを見せる引退馬保護運動.....	29
3-2-1	会員との関わり .....	29
3-2-2	馬産業従事者、地域社会との関係性.....	32
3-2-3	運動当事者同士の関係性 引退馬ホースサミットを基に.....	35
3-3	本章のまとめ 社会運動としての側面.....	38
第四章	単独化される引退馬達 当事者の語りから .....	40
4-1	引退馬との巡り合わせ .....	40
4-2	病気そして死と向き合う.....	43
4-3	本章のまとめ 単独化としての側面 .....	48

## 結論

1-1	全体の考察.....	51
1-2	謝辞.....	52
1-3	参考文献 .....	53

## 1-1 主題

本研究は競走馬産業がバブル崩壊と外国産馬の流入の影響を受け、その産業構造を大きく変える中で、引退馬保護運動が現在まで展開していく過程を捉えたものである。

第一章では、競走馬産業の歴史的変遷と特殊な閉鎖市場の形成を明らかにしながら、経済動物としての競走馬が如何に扱われてきたか、そして引退馬の発生と現状について記していく。

第二章では、引退馬保護運動の現場である養老牧場に焦点を当て、その設立事例や運営状況を通して、競走馬産業の延長線上にある養老牧場の実態を明らかにしていく。

第三章では経験運動論的アプローチから当事者の経験、問題意識、人間関係に着目し、引退馬保護運動が社会運動化していく過程を見ていく。

最後の第四章では、養老牧場の当事者と引退馬の関係性が如何に作られてきたかについて微視的に分析し、当事者が引退馬を「単独化」する過程を明らかにしていく。

## 1-2 仮説

これまで内国産馬保護政策を中心に、欧米に対して閉鎖的であった競走馬産業は1990年以降の国際化圧力とその後のバブル崩壊により、内国産馬劣勢と競馬不況という大きな転換点を迎えることになる。これにより多くの競走馬生産牧場の廃業を生み、同時に競走馬の過剰生産とそれに伴う処分先が問題となった。これまで周知されることのなかった競走馬の処分という問題は、競馬ファンなど外部者だけでなく競走馬産業内部自体からも改善を促す声上がり、産業従事者が当事者として引退馬を繋養する養老牧場を設立するようになる。その過程において、本来経済動物であったはずの競走馬が、当事者の間で唯一無二の存在として「単独化」され、こうした動きに共感した支援者にも広がりを見せながら社会運動として形成されていったのではないだろうか。

## 1-3 研究対象

研究対象となるのは、競走馬を引退した馬を繋養する養老牧場である。現在、養老牧場は全国に点在するが、とりわけ北海道にある養老牧場を対象とするのは、全国の競走馬生産の90%以上<sup>1</sup>を占める北海道という特殊な「場」において、そこで運営される養老牧場の成立過程や他者との関係性が如何に構築されてきたかを捉えるためである。そのため、これまで馬産業が経済動物としてしか扱ってこなかった競走馬を、異なる視点から捉える養老牧場の運営形態や牧場主毎のナラティブに着目し、当事者の意識や経験を言語化することで、養老牧場の実像を明らかにすることが出来ると考える。本研究で事例として取り上げる養老牧場は、それぞれA、B、C牧場及び生産育成牧場であるD牧場と区別することにする。三

---

<sup>1</sup> 全国の軽種馬生産農家808戸のうち北海道は738戸で91%  
：農林水産省生産局畜産部競馬監督課 『馬産地をめぐる情勢』令和2年12月31日時点  
p5 抜粋

牧場は、いずれも会員制の仕組みを採用し、会費や寄付で引退馬の掲揚費用を調達する点で共通するが、当事者が持つ問題意識や地域社会との関係性など牧場毎に差異があるため、異なる特徴を持つ比較対象として選別した。また D 牧場は生産育成牧場でありながら、これまで引退馬の掲揚経験があり、A 牧場と繋がりが深い。以下は研究対象に関する詳細一覧である。

	対象者	聴き取り場所	インタビュー日時
A 牧場	牧場運営責任者:a	・北海道新ひだか町静内・北海道議会議員事務所内	2018/12/1~6
B 牧場	牧場主:b	・北海道浦河群荻伏町	2019/5/16
C 牧場	牧場主:c	・北海道白老郡白老町	2019/5/12~14
		・北海道登別市札内町（預託先別牧場）	2019/5/14
D 牧場	牧場後継者:d	・北海道新冠郡新冠町	2019/5/15

#### 1-4 研究手法

本論第二章から第四章における養老牧場への聞き取り調査に関して、対面による半構造化インタビューで行った。一つの牧場に対して、計 6~10 時間をかけてインタビューが行われ、養老牧場所在地及びその周辺で場を設けた。なお一対一による対面だけでなく、牧場作業中に聞き及んだ内容及び立ち話もここに含まれる。また牧場のこれまでの活動を記録した媒体や会報もインタビューを補強する資料として付け加えられる。

いずれの牧場に対しても、設立経緯やこれまでの経験、人間関係、当事者の抱える問題意識に関連した質問を行い、それを掘り下げながら聞き取りを行う形となった。こうした養老牧場当事者の経験や意識に着目するのは、本研究が方法論的立場としてマクドナルド (1999) や富永 (2016) が提唱した経験運動論に倣った解釈手法を取るからである。<sup>2</sup>

#### 1-5 先行研究

##### 1-5-1 日本の競走馬産業に関して

引退馬保護運動の実態を明らかにする前に、背景となる競走馬産業の全体像を理解しなければいけない。小山 (2004) は、競走馬産業が北海道日高管内に集約された地域産業と化している点に着目し、そうした生産の集積の歴史的変遷とそれを可能にした競走馬団体の支援、諸制度及び慣行の存在を指摘している。同時に閉鎖的な市場環境や過剰生産、経営基盤が脆弱な中傷零細家族経営牧場の乱立など、競走馬産業がもたらした弊害を明らかにし

<sup>2</sup> 先行研究 1-5-2 参照

た。こうした状況に追い打ちをかけたのが、1990年代以降の外国産馬流入と競馬不況だとし、生き残った大規模牧場の寡占状態やコンサイナーと呼ばれる新しい産業主体の登場、生産育成技術の高度化など産業構造の変化を生み出したとしている。岩崎（2005）はこれを「内なる国際化」と呼び、競馬先進国である欧米の競馬文化の影響を少なからず日本が受けたことを示唆した。国際化の流れは、人々の競走馬の処遇に関する関心を引き起こした。それを表すかのように、岩崎は当時数少ない養老牧場の事例を取り上げ、引退後の競走馬のライフステージを「馬生」として三段階に分類した。「第一の馬生」は競走馬としてレースに出ること、「第二の馬生」は用途変更して使用されることであり、そして「第三の馬生」が養老牧場等で余生を過ごす状態を指す。一方で、岩崎によって引退馬の存在が定義されたものの、引退馬の実態やそれを取り巻く養老牧場に関しては、これまで体系的に明らかにされてこなかった。そこで本論第一章において、競走馬産業の歴史の変遷と基本的構造を踏まえながら、これまで競走馬が経済動物としてしか認識されてこなかった状況を明らかにする。その上で、引退馬概念の発生から養老牧場が競走馬産業の新たな産業主体として位置付けられ、一般化した現在に至るまでの過程を段階的に明らかにするのが、本論第一章の役割である。

### 1-5-2 社会運動論研究における引退馬保護運動の立ち位置

引退馬保護運動を一種の社会運動として捉えるために、これまでの社会運動論研究の中で様々な形に分化した理論的枠組みのいずれかに当てはめなければいけない。その点で富永の視点は、本研究にとって示唆に富むものである。G8サミット抗議運動を分析した富永は、マクドナルドが提唱した経験運動論と基本的な部分を共有しているが、2つの観点で経験運動論を含めた従来の社会運動理論を批判する。

一つは、これまでの社会運動理論が組織的な集合行動にばかり着目し、個人を組織に従属した存在としてしか捉えていなかったことに批判的な見方を持つ。例えばオップは、目標を達成するために各個人は様々な行動をし、それを集合体として対象の決定に影響を与える（2009, p38）とし、タローは、共通の目的を持ち連帯する人々による、エリートや敵対者、権威当局との間での持続的な相互行為の形態を取る集合的挑戦（1994, pp3-4）と定義する。さらに抗議行動における不満といった感情などの認知的要因を重視する長谷川は、社会運動を現状への不満や予想される事態に関する不満に基づいてなされる変革志向的な集合行為（2004, p19）とする。また、政治的機会構造論<sup>3</sup>、フレーム分析<sup>4</sup>は、参加者である個人

---

<sup>3</sup> 政治的機会構造論は、政治体制が人々にとってどれだけ開かれているかにより社会運動の性質が決定するという理論である。社会運動の性質が変質するタイミングとして、タローの指摘によれば政策決定の公開過程、有力な同盟者の有無、権力エリートの分裂、国家による抑制能力の変化が挙げられる（Tarrow 1998 Yan 2014）

<sup>4</sup> フレーム分析に関して、社会運動の促進過程における認識と集合的アイデンティティの役割を中心とした理論である。スノーによれば、[1]Frame bridging:意識的でない人々に運

はあくまで組織を構成する存在であり、運動の発生因を集合行為の諸行動に求める。それ以外にも、ハーバマスやトゥレーヌに代表される「新しい社会運動論<sup>5</sup>」は、これまでの社会運動論が対象としてこなかった運動を対象とし、個人の動機を運動の発生因に求めたが、最終的に個人は「集合的アイデンティティ」を持った組織の一員として一括りにすると批判する。(富永,p310) このように、それぞれの社会運動理論が、運動の分析に異なるアプローチを取る一方で、結局は組織的な集合行為のみを対象としていた点が明らかになる。富永は、流動化、個人化する現代社会において、今日の社会運動を理解するには「組織」や「集合的アイデンティティ」といった既存概念のみでは不十分であり、個人の分析の重要性を指摘する。

二つ目は、富永が立脚した経験運動論への批判である。経験運動論は前述した「集合的アイデンティティ」がもはや成立しない状況を前提に、「現代の社会運動をいかにして捉えるべきか」という問題意識から生じた議論である。(富永,p28) 経験運動論は、個人の身体的実践である自分自身の経験や主体性を重視し、抵抗する個人が、同時に同じ場所で互いを承認し合いつつ共に存在する場として運動を再構築する試みである。(McDonald,2004) しかしながら、これまでの経験運動論が活動家たちの会合のやり方や食志向、消費を巡る選好といった活動家個人に目を向けるものの、そうした手法や嗜好の発生と集合行動がどのように結び付いているかを十分に明らかにしていないと批判する。

富永はこの二点の批判を踏まえて、G8 抗議サミットを分析する際に、活動家の行動を「日常」と「出来事」(非日常) とに分類する。「日常」とは第一に、食住や、地域・職場でのコミュニケーションを通じて行う個人的な営みという意味である。(富永 p307) それに対して「出来事」とは、政治的目標を掲げて時間と場所を定め、ある手段を用いながらそれを達成しようとする、組織的に行われる集合行動であり、旧来の社会運動が挙げてきたデモンス

---

動体が自分たちの問題理解枠組みを与える [2]Frame amplification:問題理解の深化のための枠組みを与える [3]Frame extension:運動体が支持基盤を拡大するために理解の枠組みを拡大する [4]Frame transformation:既存の認識枠組み(動員対象者)を変える、ことを指す(Snow 1986 p464 本郷 2007) 運動の主催者はシンボルやスローガン等を掲げ、参加者を共感させることで、こうした解釈のフレームを拡大し可能な限り参加者を動員させようとする。

<sup>5</sup> 「新しい社会運動論」は 60 年代当時の社会構造の変化を前提としてなされた理論である。その対象は資本主義的工業社会に見られたような労働運動ではなく、トゥレーヌ自身が提唱したポスト工業化社会における、生存とは直接関連しない社会的対立を指す。具体的には女性運動、マイノリティー、環境保護運動などが本理論の対象としてされてきた。マルクスが主張する資本主義社会の基本的対立は、資本家とプロレタリア労働者間の階級差による剰余価値の分配を巡る対立であり、それは剰余価値の搾取のない社会の実現という目標を生み出した。ただしトゥレーヌが思考する社会対立は、そのような物質的経済的な要求だけでなく、社会のあり方、人々が自分の社会をどのようなものになりたいかという方向を巡るものである。(Yan 2014)

トレーションや集会などが当てはまる。G8サミット抗議運動も「出来事」に含まれる。こうした「日常」としての消費や人間関係、慣習、振る舞いといった活動家個々人の生活が、「出来事」としての集合行動を成立させていることを説明した。

(前略)しかし彼らを活動家らしめる振る舞いや自覚も、やはり「出来事」と「日常」の往還があるからこそ成立するのではないか。(富永,2016,p46)

本研究は、経験運動論と富永に立脚しつつも、必ずしも同様に調査分析することは出来ない。なぜなら、富永は分析したG8サミット抗議運動を「出来事」として分析し、それ以外の「日常」とを切り離して考察するが、本研究の引退馬保護運動は「出来事」としても「日常」としても成立し、その両方を兼ね揃えた性質を持つからである。「出来事」としての引退馬保護運動とは、養老牧場が日々の活動の中で支援者や来訪者との接点を様々な方法で持ち、「引退馬の保護」という単一の目的を当事者や支援者で共有し合う過程である。一方で「日常」としての引退馬保護運動は、養老牧場の当事者と外部者である家族や地域社会、そして支援者(会員)との日常的な関係性や引退馬と共にある生活を通して、彼らの慣習や思考に影響を及ぼし、やがて次節で取り上げる引退馬の「単独化」に繋がるのではないか。

こうして「出来事」と「日常」が交互に交わる中で、当事者の身体的実践や経験を基に引退馬保護運動の発生因とその全体像を明らかにしたい。また馬産業の様々なアクターが集合して引退馬に関して討議するきっかけとなった2014年の「引退馬ホースサミット」の開催も「出来事」の一例として分析する。

### 1-5-3 経済動物である競走馬と「単独化」する引退馬

競走馬は生産牧場で生まれ、育成牧場や調教センターを経て、初めて出走が許されるようになる。その後、成績不振や、高齢、怪我病気などによって競走馬としての役割が途絶えた時、引退馬として余生を過ごすか、そのまま処分されるかの境界線は一体どこにあるのだろうか。そして処分される馬と異なり、引退馬とそれを保護し生活を共にする養老牧場の当事者達との関係性には何か特別な文脈が存在するのではないか。本研究のこうした前提に対して、金澤の指摘は大いに参考になる。

金澤は経済動物としての競走馬が生産から出走そして引退までの過程を日高でのフィールドワークを基に記している。その中で商品の流通過程に関するイゴール・コピトフの分析を当てはめることで、競走馬産業にもその理論が適用できないか試みている。コピトフの商品の流通過程の分析は、モノの属性の変化に「商品化」(commoditization)と「単独化」(singularization)<sup>6</sup>という2つの理念的な極の設定を置くものである。このコピトフの分析

---

<sup>6</sup> 「商品化」とは全てのモノが商品として交換可能な状態になることを指すことである。一方で「単独化」とはモノがある社会的なアイデンティティの下で交換不可能な状態になることである。これらの過程が連続的に生起され、その過程に注目した分析の重要性を指

を利用し、日高における産業従事者と競走馬の関係内には競走馬産業独自の言説<sup>7</sup>が存在し、競走馬が「商品化」され、「単独化」に至る過程において、経済動物として交換不可能な存在になることのリスク<sup>8</sup>から「商品化」で留まらせている現状が存在し、馬自身の馬生を省いた消費構造が繰り返されているのではないかと指摘する。このことを金澤は「馬生のある段階を不可視することによって維持されている競走馬の消費構造（金澤,2016 p98）と述べる。ここでいう「消費構造」とは消費することで経済的利益をもたらすための「転用」であり、「ある段階」とは何らかの事情で競走馬を引退する過程である。その上で、金澤は現役競走馬が出走するまでの商品化される過程に重点を置いて言及されているが、単独化の過程に関しては一事例に留まり、殆ど言及されていない。

そのため本研究では、単独化に至る前段階での競走馬と当事者の出会いから引退馬との普段の関わり、そして養老牧場にとっては避けられない高齢となった引退馬の病気や死との向き合い方を微視的に分析することによって、引退馬が当事者にとって如何にかけがえない存在になったのかを明らかにしたい。

---

摘している。(Kopytoff 1986) 訳は風戸 (2006) と金澤 (2016) から参考

<sup>7</sup> ここでの言説とは、閉鎖的な競走馬取引市場での関係者同士での交渉や引退馬の動向について語られるものである。

<sup>8</sup> 金澤によれば、競走馬の経済的価値は大きい分、取引での馬の選別は経済的損失というリスクもあるため、獣医や専門家などによって慎重に行われる。競走馬の選別に失敗した場合、引退馬として養うことの不経済性を考慮すると、馬肉や殺処分への転用が多くなる。

# 本論

## 第一章 競走馬産業の歴史的形成と国際化による産業構造の変化

### 1-1 競走馬産業の形成過程とその仕組み

日本における近代競馬は、江戸時代末期に訪れた居留外国人の娯楽として展開されたものであり、日本人によるものは明治10年代の欧化政策の一環として「文明国」の証明として行われたものが初めてであるとされる。(杉本 2009) これ以降、東京上野の戸山競馬場を始め、競馬が大衆文化となっていくが、それでも当時の馬産の主な利用用途は軍馬生産が中心であり、競走馬生産は軍馬の資質改良用としての意味合いが強かった。そしてこの時点で北海道日高・十勝は1906年の第一次馬政計画により、騎乗用馬の馬産地として位置付けられている。(小山 2004) このように軍事面の馬政計画が施行され、馬品種の軍事利用による分類分けと能力試験の本格化、血統による交配が徐々に行われていくようになる一方で、戦争激化に伴い競馬文化は徐々に衰退していくようになる。

終戦後、国営競馬は廃止され、1954年の日本中央競馬会法に基づき、農林水産省監督の下、特殊法人日本中央競馬会(JRA)が民営化し、<sup>9</sup>それに次いで各都道府県の監督下に置かれる地方競馬全国協会(NAR)が発足する。またGHQにより軍馬政策は解体され、余剰となった軍馬の農用馬への転用も農機具の発達により減少していく。こうした急速な変化の中で、これまで軍馬生産を担った北海道日高地域は競走馬の主産地として形成されるようになっていくが、小山はその理由を二つの観点から分析している。

一つは外的な要因として1960年代以降の基本農政の改革を挙げ、戦後改革期における農業従事者の他農業分野進出が広く認められたことで、競走馬産業への転換を促す要因になったとしている。特に日高地域は土地面積が少なく、農業の大規模化が困難な土地条件である。特に食料生産に関しては、他の北海道地域だけでなく、全国と比べても不利となるため、積極的な転換が行われるのである。同時に70年代の減反調整による農業政策と復興に伴う第一次競馬ブームの到来が日高における競走馬産業の発展を促進させる形となった。

---

<sup>9</sup> 刑法の賭博事業として競馬が禁止されず民営化された要因として①競馬の健全な発展が可能であることが予想されたこと②畜産、福祉振興の財源として財政寄与の要素があったことが挙げられる。②においては、現在までも競馬収益として一般会計に組み込まれ、戦後日本の経済発展に寄与すべく制度上規定されている。(小山 2004)

二つ目の内的な要因として、競走馬産業に参入する上で必要な種牡馬、繁殖牝馬といった生産財の導入を容易にした慣行の存在を指摘する。通常、種牡馬、繁殖牝馬といった生産財を導入するためには多くの資本が必要となるが、当時の小規模な家族経営牧場がこれらの生産財を入手できたのは繁殖牝馬の仔分け制度と種牡馬に関するシンジゲートという二つの制度慣行による恩恵が大きい。仔分け制度とは、繁殖牝馬を所有する大規模経営牧場や馬主が種付け料を払い、生産者側は土地や労働力、生産資材、管理費など一切を提供することで、生まれた一頭目を馬主に、二頭目を生産者側が分け合う仕組みである。(岩崎 2005) 対して、シンジゲートとは一頭の種牡馬を複数の生産者が馬主や大規模牧場から共同で購入することで、以後購入した生産者達の間で独占的な使用が可能となることである。こうした制度慣行の導入と大規模経営牧場から中小零細の家族経営牧場への生産材の供給体制が競走馬産地である日高地域の発展を促した。

このような競走馬産業の発展は、特殊な産業構造を作り上げた。出走までの段階で、馬の生産と調教訓練を行う育成の2つの過程が存在するが、中小零細の家族経営牧場の大多数が競走馬の生産のみを専業とする牧場であった。なぜなら、馬の生産には特殊な技術が必要とせず、上述した他農業分野から競走馬産業に転換した生産者にとっては生産牧場に特化する方が初期投資を少なく出来るメリットがあったからである。この特徴は日本におけるマーケットブリーディングと欧米におけるオーナーブリーディングという対立概念にも現れている。オーナーブリーディングとは、一人の馬主が競走馬の生産、育成から出走、引退後の掲揚まで管理する仕組みであり、ブルジョア・資本家による趣味的な要素の強い牧場(江面 2000)<sup>10</sup>が多数を占める欧米でよく見られる仕組みである。一方で日本の競走馬産業に見られるマーケットブリーディングとは、生産育成段階で競走馬の管理責任者が異なり、出走段階で初めて馬主のものとなる。そして引退後は馬主の所有から離れ、種牡馬、繁殖牝馬への転用、乗馬牧場、馬肉など様々な消費構造へ転用されることで、所在と管理者が特定出来ない状況となることが多い。つまり生産と育成を兼業しない牧場が多数を占めた日本の馬産業の構造では、自らの管理を離れた時点で、その後の競走馬の去就を追うことは難しいのである。

ここまで、日本における近代競馬の始まりから日高での軍馬生産、そして競走馬生産に至るまでの過程、その特徴を記したが、経済動物としての馬が軍事政策と日高の農業経済に与えた影響は大きなものであったことが分かる。とりわけ生産者は仔分け制度

---

<sup>10</sup> 欧米ではこうした牧場のことをホビーファーム、ベビーファームと呼び、また企業の税金対策として運営される牧場も多い(江面 2000)

やシンジゲートなどの制度慣行の恩恵を受けることで、競走馬生産のリスクを分散させながら、結果として日高全体における馬産業の発展を促した。その中で、経済動物である競走馬は利潤を生み出す「家畜」として認識され、一生の面倒を見る「愛玩動物」として馬を捉えることは、マーケットブリーディングといった言葉に代表されるような特殊な産業構造によって阻止されてきたと言える。

## 1-2 国際化の進展

1990年代前半から2000年代前半にかけて、競走馬輸出国であるニュージーランドやアメリカなどの強い圧力を受けて、条件付きで外国産馬の日本レース開放が許可されるようになる。1度目は91年度に出された「外国産馬出走規制緩和5カ年計画」であり、後に「外国産馬出走規制緩和8カ年計画」に修正され、期間も92年から98年と延ばされることになった。これにより、96年度までに全レースの55%が外国産馬に開放されるようになったことで、生産者保護の名目で続けられた内国産馬保護政策は衰退していくようになる。それに伴い外国産馬との競争から「強い馬作り」が求められ、必然的に種牡馬の種付け料が上がったことによって生産牧場の経営を圧迫した。同時にバブル崩壊による不況で競走馬産業も大きな影響を受けたことが重なり、特に生産体制しか持たない中小零細の家族経営牧場の廃業が増加した。1-1で記された生産者のための制度慣行は、外国産馬の進出と不況に耐えられるものではなかったのである。図1は全国の生産牧場数の推移であるが、2001年から2017年までに北海道だけで533、全国的には734もの牧場が廃止されていることが分かる。一方で平成元年から平成27年にかけて競走馬の平均落札価格と最低落札価格<sup>11</sup>は上昇しており、外国産馬に対する実際の競争力は上がっているため、一部の生産者が血統の良い競走馬を独占している状況である。言い換えれば、中小零細の家族経営牧場が撤退し、大規模経営型の牧場で生産構造が集約されつつある。国際化がもたらした影響はそれだけではない。日本人騎手や国産馬の外国レースへの参加が促進され、同時に欧米と日本で異なっていた馬の年齢呼称や生産者の定義の国際統一が行われた。

こうした「強い馬作り」への要求と欧米の競馬文化の流入は、やがて産業構造の変化へと結びついていき、岩崎はこれを「内なる国際化」(2005)と呼ぶ。次節で産業構造はどのように変化したか、そして競走馬産業の延長線上にある「引退馬」概念の出現について明らかにする。

---

<sup>11</sup> 平成28年度農林水産省統計に基づく

年	単位:戸								
	全国	北海道				都府県			
		計	日高	胆振	十勝	計	青森以南	九州	
2001	1579	1303	1178	92	33	276	190	86	
2002	1536	1278	1152	93	33	258	183	75	
2003	1468	1228	1107	89	32	240	171	69	
2004	1395	1187	1074	84	29	208	149	59	
2005	1343	1149	1039	77	33	194	142	52	
2006	1276	1109	1008	69	32	167	122	45	
2007	1176	1024	933	62	29	152	104	48	
2008	1121	990	901	60	29	131	87	44	
2009	1091	973	886	59	28	118	79	39	
2010	1067	946	865	55	26	121	79	42	
2011	1029	917	836	53	28	112	75	37	
2012	993	888	815	48	25	105	67	38	
2013	959	862	794	47	21	97	63	34	
2014	915	827	762	47	18	88	61	27	
2015	893	808	745	46	17	85	60	25	
2016	865	786	725	43	18	79	55	24	
2017	845	770	709	44	17	75	54	21	

図 1 【繁殖牝馬飼養牧場数の推移】日本軽種馬協会発行「2017 軽種馬統計」より引用

### 1-3 産業構造の変化と引退馬の出現

「内なる国際化」を迎え、旧来の内国産馬保護政策が衰退すると、その代替案として「強い馬作り」を目的とする国際化対策が施行されるようになる。その内容は①生産振興としての種牡馬・繁殖牝馬の導入事業（寄贈、助成）、②育成振興としての共同育成牧場設立、育成技術者養成事業、競走馬育成施設（BTC）建設③販売振興としての市場活性化対策④経営安定化としての経営改善指導事業が挙げられる。（小山 2004）なかでも②の育成振興の観点は特に重要視され、多額の予算をかけてBTCが建設されるなどしている。同時に④の経営改善指導では、競走馬生産者への競走馬改良、経営合理化への指導が、総合農協や軽種馬を扱う専門農協、日本中央競馬会の生産対策の窓口としての役割を持った日本軽種馬協会などの連携によって行われた。

前節までで述べたように、大多数の中小零細の家族経営牧場が比較的参入しやすく育成技術も必要ない産駒の生産を担い、資金力のある大規模経営牧場が生産から育成まで幅広く行う産業構造が、バブル崩壊による競馬不況や国際化の煽りを受けた零細牧場が経営不振で廃業していくのが90年代の競走馬産業の特徴である。代わりに生き残った牧場は生産だけでなく育成にも参画するなど、生産者自らが馬産業の構造変化を導いた面が指摘できる。例えばコンサイナー<sup>12</sup>といった新たな産業主体の出現もその最たる例である。

そして、国際化による産業構造の変化と閉鎖的な競走馬市場が開放されたことで内外に

<sup>12</sup> コンサイナーはいわゆる販売代理人であるが、上場馬が市場において高値で取引されるよう、販売者（生産牧場）に代わって上場馬の宣伝と馴致を行い、また上場に係る一切の手続きを代行することで、その手数料を収入源とする者である。コンサイナーを利用することで、資金力や技術力のない零細生産牧場は、比較的少ない資金で馬を市場で仕上げる事が出来るのである。こうした新たな情報産業の登場も近年の馬産業の構造変化をもたらしている。

明らかになったことは、これまでの競走馬の過剰生産と殺処分に対する問題であった。供給過剰<sup>13</sup>に関しては、1989年度のサラブレッド一歳馬の前年生産頭数は8311頭であるのに対し、出場頭数は僅か1337頭で出場率は20%に満たない。また競走馬の殺処分に対しては、重賞レースを二度優勝した名馬ハマノパレードがレース内での骨折後に適切な苦痛軽減処置を施されずに屠殺され、馬肉として出荷されたことが報道され、物議を呼んだ。<sup>14</sup>こうした「名馬」と呼ばれた馬でも何らかの事情で出走出来なくなれば、人知れず転用される現実には、競走馬産業内部の人間だけでなく外部の競馬ファンや世間にも広く知られるようになったのである。このような競走馬の扱いをめぐる問題は、やがて岩崎の指摘する「馬生」といった新たな概念の提案や養老牧場を発生させることになる。

では「馬生」とは一体どのような概念か。「馬生」の説明に入る前に、「引退馬」とは何か明らかにしておきたい。引退馬とは、いわゆる競走馬としての役目を終えた馬である。重賞勝ち馬であると、「功労馬」と表現されることも多い。また養老牧場で繋養されていることから、「養老馬」とも表現されることがある。本論文では「引退馬」の表記で統一するが、いずれも競走馬産業の消費構造から外れた馬達であることに変わりはない。

そして「馬生」とは、人生のアナロジーとして表現される馬の一生を表す言葉である。岩崎は馬生の段階を「第一の馬生」「第二の馬生」「第三の馬生」の三段階に分類した。「第一の馬生」とは現役競走馬を引退した馬を指す。「第二の馬生」は狭義の引退馬として乗用馬や繁殖牝馬、種牡馬などの使役変更された馬のことを指す。そして最後の「第三の馬生」が養老牧場で余生を送る段階のことである。図2は競走馬の登録抹消事由の頭数分類であるが、「第一の馬生」を経て「第二の馬生」に至った引退馬の割合を示している。「再登録」とは、中央競馬→地方競馬または地方競馬→中央競馬への転換を指す。中央競馬→地方競馬の割合が圧倒的に多く、また「再登録」しても出走出来ない場合は「時効」とされる。「時効」とは「馬登録を受けてから、引き続き1年以上競走に出走しなかったことから抹消したもの」(農林水産省2017,p72)を指し、その後の行方は明らかにされていない。2017年時点でそうした競走馬は全体の30%<sup>15</sup>と多い。また「斃死」とはレースの最中に馬が骨折するなどして、今後人を乗せることが期待できない状態(予後不良)となった際に、安楽死処分などの処置がなされることを指す。(金澤2016)

ここまでで引退後のライフサイクルについて数値的に判明したが、実際の養老牧場による掲揚数は明らかにされていないばかりか、養老牧場が「その他」に該当すると推定してもその割合は少ない。

---

<sup>13</sup> 最新の2015年度は前年生産頭数が6888頭であるのに対し、出場頭数は2439頭で出場率は約35%と以前と比較して改善はしているものの、俄然として低い状況が続く。(平成29年農林水産省 馬関係資料参照)

<sup>14</sup> 「ハマノパレード事件」として知られている。予後不良となった際に、苦痛軽減の安楽死処置が施されるきっかけになった事件と言われている。

<sup>15</sup> 出典：農林水産省生産局畜産部畜産振興課 『平成29年度馬関係資料』

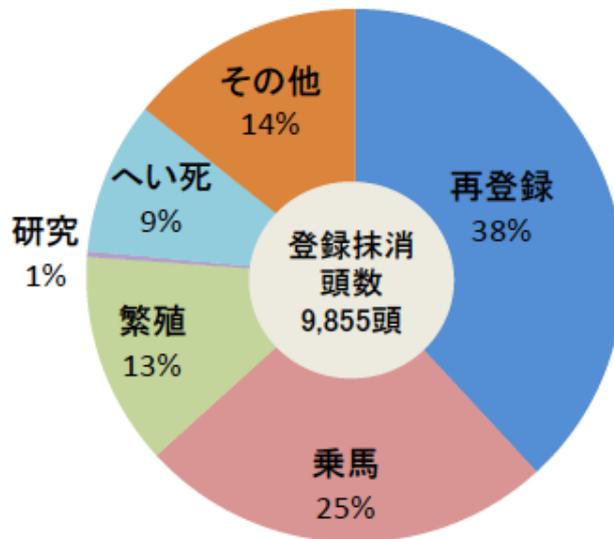


図2：出典『馬産地をめぐる情勢』農林水産省（2020,p10）

こうした現状の中で、近年の引退馬をめぐる動向は目まぐるしい動きを見せている。2015年1月にはJRA内で引退馬の処遇について議論する場が初めて設けられた。その後2015年11月に内部団体が発足し、2016年初頭にはJRAをはじめ生産者団体、引退馬協会、本論文の研究対象であるA牧場代表の北海道町議会議員などのアクターによって「引退競走馬に関する検討委員会」の設立の準備が始まっている。<sup>16</sup>これにより引退馬に関する今後の方向性、助成金財源の捻出方法、牧場に対しての財源の割り当てなどの話し合いが本格的に始まるに至った。検討委員会の設立の背景にあったのが、2014年9月に北海道新ひだか町で開催された引退馬ホースサミットである。主催者は引退馬協会とA牧場を始めとした引退馬連絡会であり、サミットでは外部への引退馬に関する情報発信と、これまでのJRA側の競走馬の処分に対する黙認の責任を追及するという二つの目的を持ちながら、意見交換が行われた。

また、2020年度の農林白書に初めて「馬の利活用」をめぐる資料が追加され、引退馬に関する方針が示された。以下は農林水産省とJRAによる現状認識を引用したものである。

- ①《引退競走馬がセカンドキャリアとして乗用馬やホースセラピー、教育、観光等に利活用されることは、馬としての活動期間を延ばすこととなり、動物福祉や競馬の社会貢献の観点からも有意義。》
- ②《世界的な競馬サークルの動向としても、IFHA（国際競馬統括機関連盟）は、引退競走馬の適切な処遇に「最大限の努力を払うこと」を競馬主催者に求めており、平成29年5月

<sup>16</sup> 公式の設立日は平成29年度12月

には、競走馬のアフターケアのレベルアップを図るべく国際レベルのフォーラム（IFAR）が発足。》

③《我が国の競馬関係者は、引退競走馬の利活用に関する施策の取りまとめや提案を行う「引退競走馬に関する検討委員会」をJRAに設置（平成29年12月）し、JRAを中心に引退競走馬の利活用に資する取組に対して検討を進めつつ支援を実施中。》<sup>17</sup>

これによると、上述した引退馬ホースサミットを始めとした競走馬産業内部の働きかけとIFHA<sup>18</sup>、IFAR<sup>19</sup>等による国際的な引退馬保護の流れが契機となって、JRAによる引退馬保護政策に繋がったと考えられる。

JRAによる引退馬保護政策は多岐に渡るものである。まず政策はセカンドキャリア支援とサードキャリア支援に分類されるが、これは岩崎の「第二の馬生」と「第三の馬生」と同じ意味を持つと考えてよい。つまり、セカンドキャリア支援では、乗馬転用へのリトレーニングやホースセラピーの推進、乗馬施設、教育機関による掲揚費用の支援など、引退競走馬の従来 of 転用方法（繁殖や馬肉等）とは異なったアプローチを促進するものである。またサードキャリア支援では、転用されない引退馬の余生を考慮した政策であり、養老牧場への掲揚費用の支援が予定されている。その一例として、2019年度から「引退競走馬の養老・余生等を支援する事業」が施行され、該当する養老牧場に対して活動奨励金（助成金）が交付されることになった。<sup>20</sup>JRAによる引退馬関連の予算は令和2年度までに91億8千万円計上されているが、活動奨励金（助成金）はそのうち31億円が割り当てられている。なお、2020年11月時点で既に活動奨励金を受け取る牧場が出てきている。2019年に現地で聞き取った情報（具体的な支給額と牧場名は伏せる）によると、「新たに従業員を雇う為の独身寮を一棟建設できるぐらい」（2019/5/末日）だとしている。

---

<sup>17</sup> 農林水産省生産局畜産課競馬監督課『馬産地をめぐる情勢』（2020,p11）

<sup>18</sup> International Federation of Horseracing Authorities

<sup>19</sup> International Forum for the Aftercare of Racehorses

<sup>20</sup> それ以前から功労馬繋養事業という助成金事業は存在するが、非常に限定的かつJRAの管轄ではなかった。JRAとは別団体のジャパンスタッドインターナショナルという団体が業務を行っており、2012年まで月3万円であったが、現在月2万円に減額され、交付対象の馬も限定されている。助成金が減った理由として、引退馬の数が増えたことやそれを保護する牧場が増えたことが原因と考えられる。

## 第二章 引退馬保護運動の現場 養老牧場に関して

### 2-1 養老牧場の概要

養老牧場とは、繁殖や乗馬等の転用を含めない「第三の馬生」に該当し、引退馬が余生を過ごす牧場のことである。日本に存在する養老牧場の正確な数は判明しないが、ホームページや SNS 等で今現在情報を発信している牧場は 35 件存在する。日本における養老牧場の始まりは、北海道白老町のイーハトーブ・オーシャンファーム<sup>21</sup>とされている。本来競走馬生産牧場であったが、1984 年に引退馬専門の養老牧場に転向した。こうした生産牧場から養老牧場へ転換する例は多い。北海道浦河に位置する渡辺牧場も本来競走馬生産牧場であったが、1990 年代後半に養老牧場に切り替わることになった（渡辺 2002）本研究の調査対象である A 牧場も同様の経緯を持つ。また 2018 年に設立されたベルサイユリゾートファームでは、養老牧場が主力の生産育成牧場とは別に運営されている。また外部に周知しない形で、生産育成牧場が牧場出身の引退馬を引き取っている可能性もあり、実際に本論で後述する D 牧場はそこで生産された引退馬を繋養していた過去を持つ。

このように競走馬産業の主体が養老牧場へと転換・兼業している例とは別に、競馬ファンなどの個人が養老牧場の設立をした例も多い。例えば高知県に位置する土佐黒潮牧場は、競馬ファンであったオーナーが重賞勝ち馬を中心に引退馬を掲揚する養老牧場である。また本研究の調査対象である C 牧場の牧場主は本来馬産業関係者ではないが、廃業したイーハトーブ・オーシャンファームの引退馬達を引き継ぐ形で設立した。このように競走馬産業の外部者が立ち上げた養老牧場は、NPO 法人引退馬協会と預託契約を結びながら、運営を行う例が見受けられる。NPO 法人引退馬協会は前身の「イグレット軽種馬フォスターペアレントの会」を引き継ぐ形で、2011 年に設立した特定非営利活動法人である。活動趣旨を一部要約すると、引退馬の福祉向上の取り組み、引退馬の預託の支援、推進による契約牧場の預託料収入の安定的確保、引退馬を中心とした地域全体の活性化寄与への取り組み、等が挙げられる。特に引退馬の預託先確保は引退馬協会の主要事業である。預託が決定した引退馬は全国の養老牧場にて預けられることになる。その際に「フォスターペアレント制度」という里親制度を適用することで、預託にかかる費用が引退馬協会への会費、助成金、物品売り上げ、寄付から捻出される。個人によって立ち上がった養老牧場は、引退馬協会のような広域ネットワークと繋がりを持つことで、引退馬の引取から財政的支援に至るまで運営を成立させている側面があるのである。

そして、こうした養老牧場は 1990 年代から 2010 年代にかけて設立時期が集中している。これは第一章で明らかにした 1990 年代の競馬不況と国際化、それに伴う産業構造の変化のタイミングと重なっていることが分かる。さらに図 4 で分かる通り、2009 年から 2014 年にかけて乗馬牧場が 400 件以上増加している。<sup>22</sup>これにより、少なくとも現在までの 30 年

<sup>21</sup> 2017 年 4 月末日廃業

<sup>22</sup> 農林水産省の統計データでは養老牧場個別の把握がされていないため、乗馬牧場として

間において、引退馬の「第二の馬生」・「第三の馬生」を担う牧場が発生・増加していると分かる。

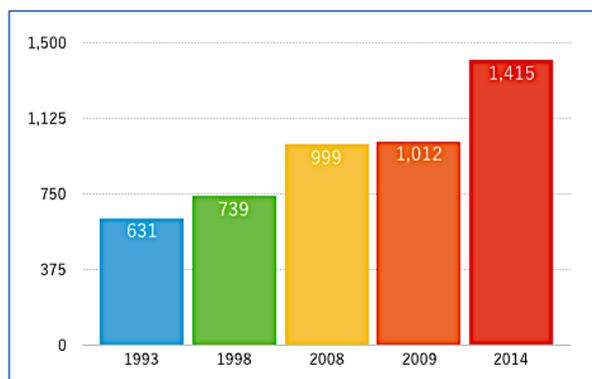


図2 [乗馬施設の推移]: 農林水産省統計資料を基に筆者が作成

次節では、3つの養老牧場の事例を取り上げ、その設立までの経緯から牧場運営について明らかにしていく。

## 2-2 養老牧場の設立事例

養老牧場を運営方法で分類すると3つに分けられる。

- ① 複数の会員が月額会費を支出する事で引退馬の繋養費用を分担し合うケース
- ② 個人が一口馬主として養老牧場に引退馬を預託するケース
- ③ 会員や馬主を募らず牧場主の費用負担で引退馬を繋養するケース

この場合、特に多いのが①と②を組み合わせながら運営する養老牧場である。本節で事例として取り上げるA牧場、C牧場はそれぞれ会員の会費を基に引退馬の掲揚費用を捻出し、同時に一口馬主の預託馬も受け入れている。それ以外にもホーストラスト、渡辺牧場(渡辺2002)などが挙げられる。一方で②のような一口馬主による預託馬を一切受け入れず、①のみで運営する牧場としてはB牧場や土佐黒潮牧場が該当する。<sup>23</sup>また③の運営方法を取る養老牧場は極めて少ない。一方で生産育成牧場がひっそりと自己生産馬を引退後に掲揚する事例があると考えられ、A牧場と関係の深いD牧場がそうした例に該当する。

前述した分類を基にすると、複数の会員を集めながら引退馬を掲揚する運営方針を持つ点ではA、B、C牧場の共通項であるが、運営に至るまでの設立経緯はそれぞれ異なる事

---

届出を出した養老牧場がある程度存在すると考えられるためである。

<sup>23</sup> C牧場が①の運営方法のみに限定するのは、「こだわり」があるからだが、それは三章で後述する。

情を持つ。本節では、A 牧場、B 牧場、C 牧場の設立までの段階を比較する事で、それぞれに異なる設立経緯と牧場主のバックグラウンドの多様性を明らかにしていく。

#### A 牧場の場合

A 牧場は新ひだか町静内市内から少し離れた山奥に位置している牧場である。2004 年に設立され、2018 年 12 月に閉鎖された。組織自体は 2024 年を目処に解散する予定である。この 5 年の年数については、現在繋養している引退馬の寿命を鑑みて残り 5 年あれば、全 8 頭を A 牧場の責任で看取ることが出来ると判断したためである。また 2018 年 11 月末時点で、全頭は別の牧場に A 牧場所有の預託馬として預けられているため、既に牧場跡地は農協に売却されており、存在しない。2018 年に閉鎖されるまで、A 牧場は三人で運営されてきた。静内地域にある生産育成牧場の牧場主であり自民党選出の北海道議会議員である f 氏が代表を務めていたが、実際の運営を担っているのは A 牧場設立当初から関わる a 氏である。もう 1 名は普段 a 氏と共に引退馬の世話を当たっている。

A 牧場が設立されたのは 2004 年 1 月であるが、その始まりは前年に起きたある出来事がきっかけであった。日高町に合併される以前の旧門別町にあった名馬のふるさとステーション<sup>24</sup>は当時珍しかった大規模な養老牧場であり、多くの会員を集めていたが、母体であった生産牧場の経営が悪化し、そのしわ寄せが養老牧場部門にも及んでいく。放置状態にあった名馬のふるさとステーションの倒産前後には、未去勢の競走馬 14 頭が狭い敷地で集団放牧<sup>25</sup>され、お互いに傷付けあう様子が動物虐待ではないかと複数の報道機関や 2ちゃんねるなどで取り上げられたことで、世間の注目を集めるようになる。日高で当時生産牧場をしていた a 氏は、この問題について競馬ファンの友人から知らせを受けて初めて知ったという。それからこの状況に危機感を持った a 氏は全 14 頭の救出を目標に動き出すことになる。当時道議 1 期目であった F 議員が交渉役に、a 氏は譲渡先への輸送手配など事務作業を担い、「名馬を救え」プロジェクトを発足させた。引退馬の去勢費用や譲渡先への輸送費用は a 氏、f 氏が全額自己負担したこと、地元選出の f 議員の影響力等があったことで、全 14 頭のうち 10 頭の引取先は即座に決定する。その多くが北海道外の乗馬施設への転用であった。しかし残り 4 頭の引取先探しは難航し、最終的に見つかることはなかった。どの馬も 19~21 歳の高齢馬ばかりで、乗用馬転用が難しいためである。そこで余った 4 頭を繋養するために設立されたのが、現在の A 牧場である。早速 a 氏はこの 4 頭の支援を募るため、ホームページ、ブログ、競馬雑誌の広告欄等を用いて情報発信を行っていく。4 頭を繋養するのにかかる経費は月に大体 6 万程度であり、それ以外の経費も合わせれば最低 80 人の支援者が必要になる計算である。しかし、この当時引退馬を保護すること自体が珍しかったため反響

---

<sup>24</sup> 会員の年間 1 万円の寄付を集めることで、その寄付金で引退馬を掲揚していく運営方法であった。

<sup>25</sup> 通常、去勢されていない牡馬は性格が激しく集団放牧には向いていないため、個別に繋養する。

は大きく、名馬のふるさとステーションの元会員はもちろんのこと、多くの競馬ファンの後押しがあった。1月末には120人の支援者が集まり、支援金は何百万円にもなった。また残された4頭は重賞経験馬であったことが幸いし、功労馬掲揚事業<sup>26</sup>から当時月額3万円の補助金が支給されたことで、毎月の支援金と合わせれば十分にやっていると見込んでいた。同時に全4頭が日高で生産された馬であったことから、会の運営方針の一つである「日高で生まれた命は日高で最後を迎えさせる」というように定めることになったのも、このタイミングである。

## B 牧場の場合

B 牧場は北海道浦河町で2016年7月に設立された会員制の養老牧場である。会員の支援を受けている引退馬3頭と自己所有馬5頭を掲揚し、引退馬は自身が馬産業従事時に面倒をみた繁殖牝馬しか繋養しないことをコンセプトに掲げている。

牧場主であるb氏は変わった経歴の持ち主である。元々東京の靖国神社で12年間事務の仕事をやっていた。特に小さい頃から馬に慣れ親しんでいたわけではなく、弟が競馬好きでジョッキーを目指していたことしか馬との接点がなかった。現在弟は競馬場関係の仕事をしている。そんな中、初めて馬と出会ったのは神社の仕事の間に趣味で始めた乗馬であった。そこからのめり込むようになる。よく通った乗馬施設では、朝から夕方まで馬房にいたほどであった。それを見かけた職員から、そこまで好きなら馬産の仕事に携わってみてはどうかと言葉をかけられたという。そこで初めて馬産業を仕事として意識するようになった。それを機に靖国神社を退職し、山梨のラングラーランチというウエスタン牧場で経営一族の世話をしながら研修生として馬の世話をすることになる。当時実家が馬産業と全く関係のないこともあって、家族には強く反対されたという。そして実際に馬の世話をすることになる。ラングラーランチにいる馬はクォーターホースが大半であったが、何頭かいたサラブレッドの美しさに感動し、競走馬産業自体にも興味を持つようになる。当時は馬産業が生産や育成に分かれていることはもちろん、産業全体の構造も全く理解していなかった。

ラングラーランチに半年程在籍した頃、ちょうど失業保険が切れたため、職業安定所で他の牧場を探すようになる。そこで出会ったのが坂東牧場であり、生産から育成まで行っている総合牧場である。B氏が坂東牧場で最初にした仕事はイヤリングと呼ばれる一歳馬のお世話をする研修であった。2ヶ月の研修期間の後、本採用で生産部門に移ることになる。坂東牧場は生産段階で、お産部門と種付け部門に分かれている。本来お産と種付けの部門が一

---

<sup>26</sup> 功労馬繋養事業とは、引退競走馬を所有している団体に対する助成金を交付する事業である。JRAとは別団体であり、ジャパNSTADインターナショナルという団体が業務を行なっている。2012年まで月3万円であったが、現在月2万円に減額され、交付対象の馬も限定されている。助成金が減った理由として、引退馬の数が増えたことやそれを保護する牧場が増えたことが原因と考えられる。

緒の牧場が一般的である。b氏は種付け部門に配属され、上がり馬や空胎馬の世話をすることになった。そこでの出来事と繁殖牝馬との出会いが後にB牧場を設立するきっかけとなっていく。その後坂東牧場では2年半働くことになる。コンサイナーの仕事も経験し、育成部門にも携わった。育成部門では、生産の時以上に怪我の絶えない日々であった。コンサイニング中に肋骨と鎖骨をそれぞれ骨折、曳き運動も毎日4,5時間やっていたため、軟骨が摩耗してしまい、今でも痛む事がある。おまけに肝臓も損傷している。

ここまでの2年半の中で、生産段階では繁殖牝馬の廃棄処分という現実を知り、育成では調教の難しさから身体をボロボロにしたことで、馬産業と少し距離を置きたいと考えようになった。その後暫く休養した後、静内町真歌にあるエバーグリーン牧場という家族経営牧場でコンサイナーを行うようになる。

エバーグリーン牧場を退職後、b氏はどうしても坂東牧場で経験した馬の廃棄処分が忘れられず、これからどのようにして馬産業と関わっていこうか悩んでいた。その時に偶然目にしたのが土佐黒潮牧場の著作であった。その頃から引退馬の養老牧場をしていきたいと考えていたため、すぐに高知の土佐黒潮牧場で研修をさせてもらうことになった。土佐黒潮牧場では17頭近くを管理しており、そこでは多くの馬が10年以上余生を過ごす事になる。そこで学んだ事の多くは現在のB牧場の根幹となる部分である。一番大きな収穫だったのは、これまでb氏が経験してきた生産育成牧場のサイクルの早い育成や調教方法とは違い、何十年と時間をかけながら信頼関係を築く人間と馬との関わり方を学べた事である。また養老牧場の経営方法の習得はもちろん、当時の黒潮牧場の会員との繋がりも出来た。そのようにして土佐黒潮牧場には半年間在籍することになる。

北海道に戻ったb氏は早速養老牧場を始める準備を始める。最初に繋養する馬は自分が名付けた馬であるBBキャンディーにすると決めていたため、調教師と連絡を取り合い、引退後は引き取る旨を伝えていた。しかし、BBキャンディーは引退レースの当日に内蔵疾患によって突然死してしまう。これによって、養老牧場の開業を延期しなくてはならず、その間だけMKランチという静内町三石の牧場でナチュラルホースマンシップの勉強を行うことになった。その時にMKランチで出会ったロバ子は現在B牧場の自己所有馬である。

まだ設立から日が浅いが、現在の支援馬3頭に加えて来年には新たに二頭引き取る予定だ。また2019年3月について施行が決まったJRAの養老馬支援事業には、B牧場は2020年度から支援条件が適用される事になっている。

## C牧場の場合

NPO法人引退馬協会と契約しているC牧場は北海道白老郡に位置し、2008年に設立された養老牧場である。代表であるc氏は長年勤めた企業の定年退職を機に現在のC牧場を始めることになった。

自身の牧場を始めるきっかけとなったのは、自己所有馬を預けていた牧場の方針に不満があったためである。乗馬を趣味とするc氏は自身の馬を預託先の乗馬牧場に預けていた

が、希望した繋養方法と牧場の運営方針が適合していなかった。C氏の場合、他に繋養されている馬たちと一緒に自由に過ごして欲しいという希望を持っていたが、預託先が養老牧場ではないため、それが叶わなかったのである。馬は本来社会性を持った生き物であるが、サラブレッドの性格上、傷つけ合うなどして単純に放牧しておくのは難しい。このように、自由にさせてやりたいといったc氏の馬の余生についての考え方と牧場の運営方針が徐々に噛み合わなくなる。同時に、長い乗馬体験で馬の殺処分などの現実に触れる機会もあったことも設立に影響しているという。

その後決意したc氏は退職金2300万円の殆どを3haの現在の土地500万円、開拓に1000万円に費やし、養老牧場を開設することになる。同時に以前から付き合いのあった、イーハトーブ・オーシャンファーム、ホースフレンド牧場にて、環境作りのための技術を学ぶために手伝うことになる。そこで高齢馬との付き合い方やサプリメントなどの普段の食事など牧場運営の指針となる考え方を習得することになる。また、イーハトーブ・オーシャンファームが2017年4月に廃業した際には、残された引退馬三頭をC牧場で引き取っている。C牧場が会員を募るのは、三頭の繋養費用を工面するためでもある。

設立当初には引退馬協会の支援も受けた。引退馬協会主催の会員向けツアーによるC牧場の認知、引退馬協会会員の預託馬を受け入れるまでの一時的な資金援助、そして牧場のホームページも協会の支援で制作することが出来た。ただし、現在深い協力関係にあるわけではなく、引退馬協会の会員が馬を見に訪問する程度である。

本節では、それぞれの牧場の設立経緯を記してきたが、共通項としてあるのはいずれの養老牧場の当事者も日高の馬産業とは関係のなかった外部者である事である。それでも北海道で馬産業従事経験や乗馬、養老牧場での手伝いなど、何らかの形で日高の馬産業に参入していく様子が見取れる。その後、日高の馬産業者や養老牧場との関係性を構築し、牧場の廃業や競走馬の去就などの情報を入手出来るようになっていく過程が明らかになる。この点でA牧場とC牧場は他の養老牧場の廃業がきっかけとなって設立された点で共通しており、在籍する引退馬はそうした養老牧場で掲揚されていた馬達で占められている。そのうちC牧場は引退馬協会の設立支援を受けている事で、C牧場が持たない馬産業者との関係性を補完する役割を持つ。一方でB牧場の場合は、牧場主が馬産業従事者であった頃に出会った競走馬のみで構成されており、A、C牧場のように会員の意向や他牧場の引退馬を引き取っているわけではない。このように様々な経緯によって設立された養老牧場であるが、次節では設立後の実際の運営状況を明らかにしていく。

### 2-3 運営状況

多様な養老牧場の形がある中で、収益性を保ちながら牧場運営を継続できている所はごくわずかである。その点で、土佐黒潮牧場はホームページの冒頭で「営利を目的として養老牧場を運営しない」事を明言している。一方で収益性確保を目指す牧場も存在する。例えば、生産牧場であるベルサイユファームは通常の預託料だけでなく、観光客や競馬ファンの宿

泊施設を引退馬の厩舎と同じ区画に併設する事で、収益性を確保しようとしている。

では、実際の養老牧場の運営状況とは如何なるものであるのか。本節で示すのは、A、B 牧場における一ヶ月辺りの収入支出を表にしたものである。どちらも多数の会員を集めているものの、引退馬の掲揚費用で殆ど相殺されているのが現状である。

明細	入金	出金	備考
会員預託賃	367800		会員一人当たり約 4000 円
預託賃		50000	A 牧場所有馬 1 頭の他牧場預託費関連
光熱・灯油費		4625	
土地賃料代		18000	しずない農協との賃貸契約
飼料代		118514	寝藁代等
削蹄・治療・薬品代		17626	
その他（雑費）		23760	パソコン修理代、猫餌代、切手代
支援金	267000		
人件費		170000	
パート代		30000	
計	634800	432525	(収支) 202275

図 3: A 牧場 (2018 年 3 月期時点)

図 3 は A 牧場のものである。

上から順に見ていくと、2018 年 3 月期時点で会員数は 80 人弱で、約 37 万円が引退馬の掲揚費用に全額充てられている。2004 年の設立当初は 100 人以上の会員がいたことに加え、会員の高齢化が会員数減少に拍車をかけている状況である。

また、しずない農協から借り受けている土地・厩舎代は年々下がってきているが、馬産業全体で飼料代（特に寝藁代）が上昇している事で、以前に比べ全体のコストは上昇<sup>27</sup>している。加えて経費として増えてきたものが治療費である。設立当初は引退馬の年齢が 25 歳未満であったため、治療費は殆どかからず大きな病気にもならなかった。しかし年を取っていく馬が増える度に、毎月治療費がかさむようになる。現在月平均で 8~9000 円と安定しているが、図 3 のように 20000 円弱程することもある。特にアサヒエンペラーには多額の治療費をつぎ込み、月に 50 万円程もかかっていた。この時は自分たちの人件費を削らなければならず、半分ボランティアのようなものであったと振り返る。3 人分の人件費は毎月 20 万

<sup>27</sup> 2018 年時点で寝藁の市場平均は 8000 円程度である。2015 年度の R 牧場の収支台帳では、寝藁代だけで 4000 円だったことから、二倍近い高騰が馬産業全体の経営を圧迫している事が推測できる。

円前後で一定しているが、急な出費である治療費等が必要となった際には、真っ先に削られる対象である。

次に支援金であるが、内訳は重賞勝ち馬に対して支給される毎月の補助金と会員でない者の寄付金で構成されており、急な出費時のために積み立てられている。そのため、こうした支援金を除くと、全体の運営資金は、毎月の会員の会費で相殺され、余剰が殆ど出ない厳しい状況である事が分かる。

明細	入金	出金	備考
会費	135500		会員一口 2500 円 (最低料金)
土地賃料代		30000	自己所有馬分の賃料含めず
電気・水道・光熱費		16000	
飼料代・薬品代		80000	
削蹄代		7500	
調教代		5000	乗用馬調教 (1 頭)
その他 (雑費)		12000	備品、重機ガソリン代等
臨時収入	約 40000		販促品、蜂蜜、寄付等
計	175500	150500	(収支) 25000

図 4: B 牧場 (2019 年 5 月時点)

次に図 4 の B 牧場の 2019 年 5 月期の収支を見ていく。

上から順に会費から見ていくと、5 月に会費を払ったのは 49/59 人であり、その殆どが 2500 円を払った一口会員である。この会費によって、C 牧場で繋養されている 8 頭のうち支援馬 3 頭の経費は全てここから賄われている。同様に土地賃料代も 1 頭につき 10000 円として計算すると、全体の土地賃料代は 80000 円であるが、会費で補っているのは支援馬 3 頭分の 30000 円のみであり、残りの 50000 円は牧場主の生活費から支出している。

B 牧場が A 牧場と比較して有利な点は、獣医ある夫が定期的に診察する事で、治療代がかからない事である。一方で B 牧場は重賞勝ち馬が在籍していないため、JRA による月額 2 万円の補助金は支給されず、その分を会員の会費と牧場主の稼ぎ (不定期パートや販促品) で支出を補わなければいけない。牧場関連の販促品や近隣農家との共同制作である蜂蜜の売り上げ、非会員の寄付等の臨時収入を含めなければ、B 牧場もまた厳しい運営である事には変わりはない。実際に、ギリギリのところまで赤字を出さない程度になっているが、それでも一年に何回か足が出てしまう事があるため、赤字部分は自らの生活費から補填している。ここまで 2 つの牧場の事例を記してきたが、会員数や掲揚頭数などの牧場規模に差異はあるものの、会員の支援だけでは牧場運営が成立しにくい現状が明らかになった。また複数の会員を募らず、個人が引退馬を預託する方式を取る牧場でさえも、毎月の預託料だけで莫大

な利益を出す事は到底見込めない<sup>28</sup>。同時にそうした牧場では、預託者が途中で払えなくなり、牧場主に負担がのしかかるリスクも考えられる。このように養老牧場が収益性の高いビジネスとして成立するにはいまだに厳しい状況が続いていると言って良いだろう。

## 2-4 本章のまとめ

2-1 で養老牧場が 1990 年代以降増加してきた状況を明らかにし、2-2 で養老牧場創成期における設立経緯を記した。そして、その時点で成立した養老牧場の多くが本来産業従事者によって設立されたものである。同時に馬産業従事者ではない外部者の設立の例も見受けられる。その場合の設立の過程とは二種類に分類できる。一つは、外部者が何らかの形で馬産業と関わりを持つことによって、養老牧場設立の足掛かりとしていくケースである。馬の基本的な世話等の技術習得や地域産業の主力である馬産従事者との関係構築は、外部者が馬産業に参入することによってしか獲得できないからである。二つ目は、個人が引退馬協会と協力関係を築くことで、設立支援や馬の繋養費用確保をスムーズにするケースがある。引退馬協会との繋がりには、これまで養老牧場が馬産業との協力関係で補ってきた部分を補完する役割を持つ。

2-3 において、こうして設立された養老牧場の実際の運営状況を明らかにした。多くの養老牧場が会員制の運営方法を取る一方で、収益化が難しい現状が浮き彫りになった。言い換えれば、競走馬産業の延長線上にある養老牧場は、ある意味当事者達の犠牲の上に成り立ち、不安定で脆いシステムで運営されている現状があるのではないだろうか。

そして次の三章では、当事者が養老牧場をビジネスとして捉えるのではなく、彼らの問題意識やこれまでの経験が養老牧場運営の原動力となり、また周囲を巻き込みながら社会運動として機能していく過程を見ていきたい。

---

<sup>28</sup> 地域によって預託料は様々であるが、概ね 50000~80000 円の間で収まっている。日高・胆振地区の場合は、殆どの牧場で 50000 円として設定されている。(2019 年 5 月聞き取り)

### 第三章 引退馬保護運動 当事者の語りから

競走馬の処分自ら問題意識を持ち、活動を始め当事者となる過程で、彼らの人生に何が起きたのだろうか。本章では当事者としての意識や経験に着目し、彼らの活動を微視的に分析する。また取り上げる牧場は第2章で扱ったA、B、C牧場及びD牧場である。なおD牧場は生産育成牧場であり養老牧場ではないが、R牧場と関わりを持ち、本業の傍らで引退馬を掲揚していた数少ない事例として取り上げることにする。

#### 3-1 問題意識の芽生え

運動当事者の問題意識が芽生えるきっかけとなった出来事や運動への意識を彼らの経験を基に明らかにしていく。

A牧場の設立自体は他養老牧場の廃業がきっかけとなったが、牧場の運営責任者であるa氏は日高に参入する以前から競馬ファンとして、競走馬の引退後の去就の理不尽さに問題意識を抱え続けていた。そうした意識を抱えながら、日高の馬産業に従事した当時を振り返る。

「(馬産業に対しての抵抗感)私はないです。競馬が好きで(廃棄処分)が非道徳的なんじゃないのってずっと思ってたから。なんで命を全うさせないんだろっていうところから入ってるから何も疑問もないし、抵抗もない」(2018/12/6)

競馬で知った殺処分を「非道徳的」と表現するa氏だが、決して競馬文化自体を否定しているわけでは無い。それどころかa氏の競馬ファンとしての考えは牧場運営に影響を与えている。

a氏が競馬ファンを始めた1990年代初頭は未だに外国産馬の出走は少なく、G1レース<sup>29</sup>で活躍する馬は日高の馬ばかりであった<sup>30</sup>。日高や静内の小規模な生産牧場が互いにしのぎを削り、G1に勝てる馬を生産するために奮闘し夢を掴む瞬間が一つの物語として感じられ、a氏を熱中させた。同時に、その競争に敗れ、日の目を見なかった馬たちを助けたいという漠然とした思いを当時から持ち続けていたのである。実際これまでに受け入れてきた馬の中には有名な馬はいるものの、G1で優勝した馬は1頭もおらず、最高で2着である。

---

<sup>29</sup> 競馬レースの中でも重賞クラスのグレードの高いレースである。春秋の天皇賞や桜花賞、菊花賞などが有名である。

<sup>30</sup> 小山や岩崎が指摘しているように、1990年代に競走馬産業の活性化を名目に内国産馬の優遇を撤廃し、欧米のサラブレッドが輸入されたことで徐々に勝ち星を挙げるようになった。

その意味で、A 牧場にはレースの主役たちというよりも脇役が多い。これまでも、G1 優勝馬が種馬としての役目を終えた後の引き取りの話は何件も貰っているが、断わり続けてきた。G1 優勝馬はそもそも引き取り手が見つかりやすく、A 牧場でわざわざ繋養する必要がないこと、そして何よりも一頭の競走馬の人気は永遠に続くものではない。毎年新たに強い競走馬が現れ、その度に注目を浴びるからこそ、ファンの心理も移ろいやすいのだと a 氏は考える。

「G1 優勝馬を扱うと簡単にお金が集まるんですよ。でも簡単に無くなるんですよ、一過性のものだから。(中略) それは会の財務を扱う身としたらそんなことは絶対に出来ない。それだったら、本当にその馬が生きてて良かったなという思いの詰まった馬を預かりたい」  
(2018/12/1)

純粹に強い馬よりも、“物語のある”馬こそが長く愛されることを、a 氏自身も競馬が好きだったからこそ、誰よりも分かっていた。こうした引退馬の選別は、限られた馬房数と厳しい運営状況の養老牧場にとって、避けて通れない作業である。

「守らなきゃいけない命もあると思う。いや、全部が全部守らなきゃいけない命だよ。だけど一万頭毎年生まれてそれを全部受け入れる施設は日本には無いでしょ、こんなちっちゃい国だから。だから、それはもう選ばれても仕方ないと思うんですよ」  
(2018/12/1)

そして A 牧場によって「選ばれた」引退馬達を救うために、設立当初にホームページ等で情報を拡散した際には、多くの競馬ファンの賛同が集まった。a 氏はこうした反響の大きさに手応えを感じていた。当時を振り返る。

「それだけ馬を案じてくれている人がいると分かって手応えを感じたわけですよ。じゃあ本格的に、これは引退した馬たちの未来を救うために何かおつきいことが出来るんじゃないか。(中略) 今まで見て見ぬ振りをしてこなきゃいけなかったり、引退って暗いイメージだったけど、それを明るなものに変えていこうじゃないかと」  
(2018/12/3)

a 牧場は 2018 年 12 月で閉鎖され、閉鎖間際の時点で会員数も 80 人を切っていた。会自体もちょうど 20 年目の節目の年である 2022 年に解散となる。理由は多々あるが、決して否定的なものだけではない。なぜなら引退馬保護の活動の裾野を広げられた自負があるからである。そして活動の流れを次のバトンに繋げたいと考えている。必ず数年後には JRA から出る補助金を受けながら、R 牧場と同様に功労馬施設をビジネスとして経営する人が

現れると M 氏は確信している。

「引退馬を考える土台を作る。私達は次世代の馬達の突破口を作れたわけだから。」  
(2018/12/3)

B 牧場主の b 氏は、「馬が好き」という理由で日高の馬産業に従事することになる。最初に坂東牧場で本採用され、生産部門に配属されることになる。坂東牧場は生産段階で、お産部門と種付け部門に分かれている。本来お産と種付けの部門が一緒の牧場が一般的であるが、b 氏は種付け部門に配属され、上がり馬や空胎馬の世話をすることになった。そこでの出来事と繁殖牝馬との出会いが後に B 牧場を設立するきっかけとなっていく。種付け部門で一番初めに携わった繁殖牝馬 3 頭は廃馬になる予定の馬であった。馬主の意向により、最後の 1 ヶ月間はゆったりと余生を過ごさせ、たくさんの青草を食べさせるなど丁重に扱って欲しいと牧場側をお願いしてきたため、その役割を b 氏が担うことになったのである。通常廃馬の世話係には、世話をする馬が廃馬であるということは絶対に直前まで知らされない。さらに牧場関係者と馬主も、従来廃馬を担当するのは男性であると理解していたため、b 氏のような女性が世話をすると感情的になるという理由で、尚更処分通知を遅くした。結局、処分予定と処分理由を聞かされたのは、処分の数日前であった。馬産業に従事するまで知らなかった競走馬の殺処分という現実について、当時の b 氏は何を思ったのだろうか。

「3 頭いて本当に毎日可愛がったんですよ。(廃棄処分が) 分かった後もずっと可愛がって。皆にも、処分する馬に思い寄せたって辛くなるだけだぞって言われたんだけど、でも私が最後まで愛情を注ぎたいと思って。」(2019/5/16)

この時の馬は足が弱っていた高齢馬二頭と若い 7 歳馬であった。7 歳馬は子宮の問題により、若くても受胎出来ない状態であった。高齢馬の処分にはまだ納得が出来たが、7 歳という若すぎる馬の処分に b 氏は納得がいかなかった。その時は乗馬転用などの方法がなかったのか散々、上司に抗議したという。しかしながら、7 歳馬の性格が荒々しく乗用馬には不向きという理由で訴えが受け入れられることはなかった。処分の日は世話係には知らされなかったため、b 氏がちょうど休日の日に廃棄処分された。b 氏にとって、この時の出来事は特に印象に残っていることでもあり、引退馬へ関心を向ける契機となる。

「その印象が強烈に残っていて、その子達の動画とかも全部撮っていたんですよ。やっぱりもう、知らずに消えていくなら、私が全部覚えておくと。今でも辛い時とかは見返したりするんですけど」 (2019/5/16)

ここまで勢いで競走馬産業に飛び込んで、たったの3ヶ月の出来事である。B氏は当時を振り返って、経済動物としての認識が欠けていたかもしれないと振り返る。また上司や馬主があの時処分を自分に伝えなかった事は、これまで延々と繰り返されてきた廃棄処分を受け入れるための方法であり馬産の中で生きていくためのマナーだったのではないかと考えているという。

B牧場を設立してから2020年で四年目となるが、いずれ自らが世話した馬を看取るタイミングで牧場を存続するかどうか判断に迷っている。

「何頭か他に引き取りたい子とかもいたんですけど、どう頑張っても縁が繋がらない子が多いんですよ。そういう場合は仕方がないって思うしかないですよね。」（2019/5/16）

「あとは自分の好きな馬と静かに暮らしたいっていうのがありますね。会員さんを募集しているけど、本当は馬と静かに仙人みたいに暮らしていけたら（中略）そういうつもりでやっています。」（2019/5/16）

ただし、生産育成牧場で働いてきて、自分と同じように競走馬産業で葛藤を抱えながら仕事をしている人も多く見てきた。そのような思いを抱いている若い人がいれば、ぜひ継いでもらいたいと思っているという。

### 3-2 共感 広がりを見せる引退馬保護運動

会員、馬産業者、地域社会、養老牧場同士の横の繋がりとといった関係性の存在は養老牧場の運営にとって必要不可欠である。

3-2-1で会員との関係性、また3-2-2では馬産業者や地域社会の関係性を当事者の語りから明らかにしていく。

最後に3-3-3では、2014年に開催された引退馬ホースサミットの録音データを基に、養老牧場・引退馬協会の繋がりと運動当事者達同士の意識の相違を明らかにしていく。

#### 3-2-1 会員との関わり

第二章でも触れた通り、養老牧場の経費の大半は会員の会費で賄っている。こうした会員の会費は牧場や馬に対する思い入れと直結するため、時に会員の発言が牧場の運営に強い影響力を持つようになり、養老牧場を盛り上げる一方で、実際の運営当事者のやり方と齟齬が生まれる要因ともなる。

A牧場の会員の特徴として、熱心な競馬好きの中老年世代が多いことが挙げられる。若年世代は少なく、A牧場では彼らのことを「オールド競馬ファン」と親しみを込めて呼

ぶ。A 牧場では、こうした「オールド競馬ファン」のような会員が牧場の運営方針に積極的に関わる仕組みを取る。例えば、どの引退馬を引き受けるかは、地区ごとに存在する会員リーダーと代表 f 議員、a 氏の話し合いで決定される。このように、受け入れる馬の判断は A 牧場の独断では行われない。会員の意向に沿って決定することで、会員の間でも馬に対する責任を持たせるためだ。ただし、どのような馬を選ぶかは a 氏や f 議員の中でも明確な基準がある。その基準とは「レースで勝ちきれなかったがファンの期待が大きかった馬、何人もの人たちに支えられてきた馬たちは最低限生かさなくてはいけない」という。そして個人の思いで繋養する馬とたくさんの人の思い入れがある馬では、意味が違っても考えている。会の運営を考慮すると、会員全員がその馬に対しての思い入れがなければ、お金を出し合うことはないからである。

また会員と非会員の一般の見学者では対応の待遇を変えている。会員が来た際には一頭ずつの詳しい状況を説明し、放牧地にも自由に出入りさせているが、一般の見学者には 15 分程度の見学時間しか設けず、放牧地外からの見学に限っている。このように差別化をすることで、会員へのメリットが強調されるように努力している。

一方で会員がお金を払わなくなり、A 牧場の引退馬たちが命を全うできなくても自分たち自身が馬たちの命を担う責任はないと考えている。罪になるのは会員である。会員に頼まれてお世話をしているという風に割り切らないと馬たちの命は背負えない、と a 氏は語る。馬たちを養う自分たちの役割とお金を出さず会員の責任を明確に線引きしているのだ。a 氏が会員に常に言っていることがある。

*「あなたの好きな馬の命を守りたいなら、その馬の命は全うさせてあげてください。値上げに反対されるのであれば、その馬は淘汰されるしかありません。」*

もちろんこれは A 牧場の本意ではない。しかしながら、自分たちの人件費を削りつつ、そして競馬離れによる会員数の減少というギリギリの運営の現実を考えると、このように酷なことを伝えなければいけない。a 氏は目をそらしながら、本音を吐露した。

B 牧場も A 牧場と同様に会員制を取るが、熱心な競馬ファンが少なく、会員は牧場の運営に関与出来ない点で A 牧場と大きく異なる。

B 牧場は会員数が 50 人弱の「完全プライベート」な牧場であり、会員以外は見学も出来ない。そして、その会員の多くが熱心な競馬ファンではなく、ツイッター等の SNS 経由で、C 牧場を知り、b 氏自身を応援している会員が多いのだ。これには重賞勝ち馬などの有名馬が居ないことも理由として挙げられるが、日々の活動をツイッター等で頻繁に更新するようにしているため、そこで関心を持つ人が多いためである。会員の多くは一度も B 牧場を訪れた事のない人であり、さらに馬の事自体に無知な人も多いという。中には支援馬ではない b 氏の自己所有馬であるロバ子のファンだからという理由で会員になってくれた人も存

在する。実際にこうした会員層を考慮し、自ら製作したホームページは複雑になりがちな牧場経営のシステムを分かりやすく簡単に理解できる事に重点を置いたものになっている。それも他の養老牧場とは違った会員層が育まれている一因であると言える。

B 牧場では馬の受け入れの条件として、どんなに有名な馬でも自分がお世話をした思い入れのある繁殖牝馬しか受け入れないことを掲げている。A 牧場と異なり、会員とは一定の距離を置き、b 氏自身が繋養したい馬を決め、その馬の管理方法にも会員は口出しをすることが出来ないようにしているのだ。そのため、「他人の思い入れが強い」ということで預託馬も受け入れない。B 牧場に「ライトな」会員が多いのは、むしろ b 氏の運営方法に適っているとと言えるだろう。

ここまで会員との付き合い方に慎重になるのは、一頭の引退馬を巡ってトラブルを起こしたからである。それは b 氏が牧場を開設してすぐの 2016 年の出来事に遡る。芦毛のアッシュアッパーは流産が続いた事により 13 歳で繁殖牝馬を引退することになり、B 牧場の支援馬第一号として 2016 年 11 月に受け入れた。実はアッシュアッパーは b 氏が以前勤めていた黒潮牧場の頃からの知り合いから相談を受けてやってきた馬であり、お世話をした馬ではない。しかし、黒潮牧場からの知り合いの頼みであったことから、どうしても断りきれなかったのである。

「どちらかと言えば苦手なタイプだったんですよ。(中略)馬をイメージで見ているっていうか、綺麗な馬が好きでっていう割と馬に夢を求めている感じの人だったんですよね、ただ馬を可愛がる気持ちは一緒だし、馬には罪はないし」 (2019/5/16)

b 氏は、その人物との間で馬への考え方が自分と異なることを認識していた。これまで b 氏自身が馬産業の暗い一面も知っているからこそ、競走馬の華やかな世界しか知らないその会員とは意見が合わなかったのだ。そして黒潮牧場時代も人間関係のトラブルが運営に支障が出ているのを見てきたこともあり、「何となく嫌な予感がした」という。

当初その人物からは月 3 万円しか出せないと言われたため、一旦 B 牧場の会員になってもらう事で、他会員の会費と合わせてアッシュアッパーを繋養する方針になった。通常預託であれば、最低 6 万円なければ繋養するのが難しい。結果としてこの時の金銭的な融通やその会員の思い入れの強さが b 氏を苦しめることになる。

その後ツイッターでアッシュアッパーを引き受けた事を告知したところ、その芦毛特有の見た目の可愛さからか、会員もさらに増えた。受け入れ後、b 氏とアッシュアッパーとの関わりが増すにつれて、よく T 氏に懐いたという。だが b 氏にばかり懐く事は、その人物にとっては気に入らない事であった。また自己所有馬であるロバ子とアッシュアッパーをペアにしていたが、上下関係ではロバ子の方が強い。そのため、その人物から見てロバ子がいじめているように感じられた事で、強制的に離して欲しいと飼育方法にまで口出しをするようになってきた。(実際、アッシュはロバ子に依存する程、仲が良かった)さらには自

分の会費を三万円から（黒潮牧場と同じ）五千円にしてくれないかと要求され、金銭的な問題でも揉めるようになる。こうした人間関係がやがて衝突を生む。

「それはちょっと話が違うんじゃないですか、って喧嘩っぽくなってしまって」

(2019/5/16)

アッシュは本来その会員がお願いしてきた馬であり、仕方なく三万円と他の会員の会費で賄ってきた部分があったため、こうした要求に当時ショックを受けたという。

そのようなトラブルの最中に、アッシュアッパーはB牧場に来て僅か一年も経たず14歳で亡くなる事になる。解剖により、死因は血腫が破裂した事による突然死であった。その血腫がいつ出来たものなのか不明ではあるものの、現役時代に続いた流産などから推測し、ある程度b氏の周りの関係者はアッシュアッパーの死に対し冷静な判断をしてくれた。一方でその人物は、B牧場の不手際で亡くなったと判断し、SNSで牧場を中傷した事で、アッシュの死に追い打ちをかけるようにb氏を精神的に追い込む事になった。

それ以来誰かの思い入れの強い馬は預託を含めてどんなに頼まれても飼わないようにしている。この時の人間関係のトラブルという「経験」が大きな教訓となり、B牧場の運営方針を形作るものとなっているのだ。

### 3-2-2 馬産業従事者、地域社会との関係性

現在では、全国各地に養老牧場が存在するが、競走馬産業の集積された北海道において養老牧場を運営することは、北海道外で養老牧場を運営するのとは異なる意味を持つ。一見相反するように見える養老牧場と既存の競走馬産業の両者が、お互いの存在を認めることで競走馬産業を構成していく過程を本節では明らかにしていく。

A牧場の事例から見ていく。F氏やa氏が牧場を設立した当時の周囲の反応は様々であった。一番多かったのは、引退馬を集めて何をするつもりなのかという興味本意の反応であった。その頃はまだ引退馬という概念自体が浸透していなかった時期である。また、a氏は怖い思いも経験するようになる。放牧地に勝手にゴミを投棄されたことや、突然知らない男性から、ここで何をやっているのかと問い詰められたこともあった。一方で日高管内の馬産業の反応は意外にも好意的であった。地域には事前に事業の説明をしていたこと、何より道議会議員であるf氏自身の地元の支援者が居たことで、近隣の生産牧場が余った牧草を分けてくれるなどしてくれたという。

このようにa氏と地域の馬産業従事者は現在まで良好な関係を保っており、生産者も度々訪れる。A牧場で掲揚されている33歳のプリンセススキーの生産者もよく訪れる一人である。

「そんなに長く生きられることが不思議って言ってる。馬が長生きするっていう実感が無いの。みんな生産者はね、最後まで生かしたことがないから。」 (2018/12/3)

さらに A 牧場の活動で、自分たちの生産馬を看取ってくれていることが自らの罪滅ぼしになっていると a 氏はよく聞かされるという。馬産関係者の中には、これまで死んでいった馬たちへの罪の意識を感じる者が多い。それは馬産業に関わっていく以上、淘汰されていく馬に対して他に方法がないため、目を瞑らざるを得ない状況であったからである。生産者達とこれまで接してきた a 氏はこのように述べる。

「(生産者は) 見捨てているわけではない、でも経済動物だから仕方ないんだと割り切ってきた部分というのが強くあって、うち (A 牧場) みたいな牧場が出来たってことは日高にとって誇りになる、って皆が認識してくれた。それもやっぱり大きかったと思いますよ」 (2018/12/3)

同時に昔と今の変化に当事者自身が気付いていることがある。

「結局処分しているんだけど、今まで内緒話のようにコソコソと馬の処遇について噂されていたものが、どっかで生きてるかもしれないという微々たる可能性を感じるようになったのかな」 (2018/12/1)

また馬の引き取り先について生産者自らが相談してきてくれることが増えてきたという。A 牧場と乗馬施設や道外の養老牧場などがネットワークを持っているためである。その場合、馬の掲揚方法にはこだわらない。乗馬でも養老牧場でも、それ以外に乗用馬との繁殖牝馬としてなど、常に何通りの選択肢がある。これにより、これまで 40 頭が次の引き取り先のあてが見つかったが、一方で 16 件がどうしても見つからなかった。馬の出自として、乗馬上がりの馬と地方競馬を転々としてきた馬(種牡馬にもなれないから)が一番多く、その次に個人で所有しており、自分で引き取ることが困難なため良い方法はないかという相談が多いという。そして自分たちの馬の行く末を相談しにくる関係者たちに、必ず伝えていることがある。それは最後まで馬の行き先を見失わないようにすることである。必ず馬はどこかで居場所が変わるため、それを見逃してしまったら致命的であると、a 氏も生産をしていた経験から教訓として常に理解していることである。

A 牧場と繋がりのある生産育成牧場の D 牧場は、2014 年に開催された引退馬サミットにもパネリストとして参加している。後継者である d 氏は町議会議員も兼務しており、F 議員の秘書を務めていたこともある。引退馬ホースサミット参加のきっかけは A 牧場の頼みによるものであり、生産者としての立場から引退馬保護の可能性について言及する役割を担

っていた。その縁で A 牧場の引退馬を一時的に預かっていたこともある。当時を振り返ると、引退馬サミットは、周りの引退馬に対する反応が変わった一つの突破口だったと感ずるといふ。引退馬サミットへの批判的な反応も多かったが、JRA 側の協力もあり、周りの同業者も理解を示すようになったといふ。タブーとして見て見ぬ振りをしてきたことに対して、違和感を覚えることが徐々に広がっているのを感じている。

d 氏自身が引退馬について意識し始めた時期は幼少期の頃からであった。しかし、一方で父親や周りの反応を見て、馬の去就については聞いてはいけぬものだと思えていたといふ。そのように聞かぬ、話さぬことは一種のマナーだと思えていたのだ。引退馬サミットが開催された当時を振り返ると、産業界者の引退馬に対する反応が変わった一つの突破口だったと感ずるといふ。

ただし、自らが実際にそうであるように、利益を生まなくては行けぬ生産者である以上、愛着だけで経済動物である競走馬を繋養し続けることの難しさを理解しているため、今後も積極的に保護活動に取り組んでいく予定はない。実際に引退馬サミットでは、本業である牧場を経営しながら引退馬を何頭も繋養するには資金が足りずに現実的ではない、として JRA や支援者など外的支援が引退馬保護の大前提であるとの意識が発言から読み取れる。

また近年になって NPO 法人引退馬協会の北海道支部が、協会所有の馬の預託をお願いしてくるといふ。しかし金銭的な折り合いがつかぬことやトラブルの噂をよく聞かされ、周りの反対もあり引き受けていない。d 氏自身も「あまり深入りしないようにしている」とし、積極的な保護運動にはある程度距離を保っている。

B 牧場主の b 氏も生産牧場に従事していた頃に、多くの馬産業界者との関係性を作ってきた一人である。そのうち静内町真歌に位置するエバーグリーン牧場という家族経営牧場でコンサイナーを勤めた経験をした。コンサイナーで自分の世話をした馬が初めて売れた時、エバーグリーン牧場の家族は自分のことのように喜んでくれたといふ。そこで初めて、馬で生活している人たちがいるという事を我が身で実感することが出来た。それは大規模な総合牧場の坂東牧場では実感できなかつた事であった。

「どっちが悪で、どっちが善なんてないのかもしれないなって。そこで実感として、生きていくために皆やっているんだ、って分かつたのは大きな収穫でした。」

(2019/5/16)

それでも JRA はもちろん競走馬産業界に対して複雑な思いは捨てきれない。閉鎖的な市場取引が続けられている現状では、関係者であっても馬の動向は追いにくい事は日々実感している。部外者であつたら尚更である。このように引退馬というムーブメントが最近になってようやく高まりながらも、JRA の閉鎖的な市場環境から起こる弊害や過剰生産の結果を自分たちが尻拭いしていく限り、競馬は応援できぬと語つた。獣医である夫も競馬場で常

日頃仕事をしているため、自身の活動に理解を示して欲しいと考えている。

「馬で稼いだお金は馬に還元して欲しいので、主人も馬で稼いでいるわけだから還元していただく、という風に思っています。」 (2019/5/16)

### 3-2-3 運動当事者同士の関係性 引退馬ホースサミットを基に

2014年に北海道新ひだか町で開催された引退馬ホースサミットは、2019年度施行のJRAによる養老牧場への助成金制度のきっかけとなった「出来事」である。当日は日高軽種馬農業共同組合所有の多目的ホールを使用し、ホール中央のパネルディスカッションのブースを囲むように、11団体の養老牧場の紹介ブースを配置する形で行われた。1日のみの開催であったが、100人以上の来場者が訪れ、北海道テレビの取材が入るなど反響の大きいものとなった。

11団体の養老牧場とは、A牧場とNPO法人引退馬協会を主宰とする「引退馬連絡会」のことである。「引退馬連絡会」とは、2014年6月に設立された養老牧場、団体の連携組織であり、その加盟牧場の所在地は、主要な馬産地である北海道だけでなく、関東では千葉、埼玉、九州では鹿児島まで全国的に広がる養老牧場をカバーしている。これまで養老牧場同士の個々の繋がりには存在したものの、引退馬に関する外部への働きかけやイベント開催のためのネットワーク構築が広範囲に行われたのは、今まで見られなかった動きであった。そして、設立から僅か3ヶ月後の9月に開催された引退馬ホースサミットは、引退馬連絡会にとって外部発信の初めての試みであった。

また引退馬連絡会には以下の目的<sup>31</sup>が掲げられている。

1. 会員相互の意見・情報交換
2. 引退馬のQOL (Quality Of Life)の維持向上を目的とした情報交換 (獣医師を介した治療経験の情報交換など)
3. 引退馬への関心を深めることを目的としたイベントの開催
4. 「引退名馬繋養展示事業助成金」交付に関する提案
5. 新たなる助成金や基金の開拓と創設

上記の項目はいずれも引退馬ホースサミットのパネルディスカッションにおいて、議題の対象とされ、5人の登壇者がそれぞれに発言をしていく。特徴的なのは、そのうち3人は養老牧場当事者以外の馬産業従事者が登壇していることである。パネルディスカッションの登壇者として、生産育成牧場であるD牧場、中央競馬会新潟馬主会会長I氏、獣医師の三

---

<sup>31</sup> 「引退馬連絡会」2014年6月3日プレスリリース参照。2020年12月時点で、埼玉県のとかがわHORSE GARDENが脱退し、10の養老牧場・団体が加盟している。

者が A 牧場代表 F 氏、引退馬協会代表 N 氏と共に登壇した。また登壇者ではないが、日本軽種馬振興会会長、静内農協役員・生産者も出席している。そこには引退馬の余生に関する問題を養老牧場当事者だけで共有するのではなく、馬産業全体の構造的問題として考える必要があるという「引退馬連絡会」の問題意識が捉えられる。

パネルディスカッションでは、A 牧場代表 F 氏が司会進行を務めながら、引退馬に関する繋養、治療法、海外事例の紹介、助成金獲得に向けた働きかけなどが話し合われた。

このように、引退馬に関する現状や日々の世話、治療に関しては概ね全体の方向性は同じであるものの、同時にそれ以外の点で意見の相違が顕在化している。

以下は引退馬ホースサミット当日 9 月 14 日の録音データを基に、筆者がそれぞれの発言の趣旨を要約したものである。

#### 引退馬協会代表 N 氏

「引退馬は競馬ファンのためだけに存在するのではなく、全国に馬のいる風景を作るためにも必要である。そのために引退馬を乗馬クラブに乗用馬として転用して殺処分を減らそうとしても、果たして受け皿があるのかという疑問が残る。むしろ我々引退馬協会の指す引退馬とは、乗馬などの仕事をしなくても生かされる馬のことであり、一頭一頭の馬を幸せにすることが出来れば良い。戦前にいた軍馬は 150 万頭と言われているが、それを考えると年間 7000 頭生産される競走馬達全頭を救うのは不可能ではないのではないか。」

#### 新潟馬主会会長 I 氏

「戦前の軍馬と競走馬は同じ性質のものではない。また引退馬の中には乗用馬は含まれないという N 氏の認識と異なり、私をはじめ多くの馬主は引退した馬は全て引退馬扱いとしている。一番悲惨なのは、重賞レースで活躍した馬が行方不明になったり屠殺されたりすることであり、私も心が痛む。現状として全頭は助けられない。少なくともファンの多い馬は助けていきたいと考えている。私は恵まれていることに、これまでオーナーとなった引退馬は全国の乗馬牧場に預けている。」

#### 生産育成牧場 d 氏

「引退馬の掲揚先を頼まれた際に、どこか預かれる乗馬クラブに連絡を取ってその後の引き受けをお願いすることもあった。乗用馬として活用されない場合、乗馬クラブの判断に任せ、その先のことについては関与していない。」

N 氏と I 氏の見解は、2 つの点で相容れないものとなっている。一つ目は、引退馬の概念の認識の相違である。N 氏にとって引退馬とは「仕事をしなくても生かされる馬」という表

現のように、乗用馬などの人のために働く馬ではなく、養老牧場で余生を過ごす馬のことを指す。一方でI氏は、競走馬を引退した時点で全ての馬は引退馬とされ、引退馬として余生を過ごしていくためには乗用馬への転用などの利活用も選択肢として含まれるとする。またD牧場d氏も明確には言及していないが、これまでの経験で引退馬の掲揚先として乗馬クラブを検討していることから、I氏の考えに近いと考えられる。

このような両者の認識の違いに関して、第二章で取り上げた岩崎による三段階の引退馬の「馬生」に当てはめると、N氏の認識は養老牧場での「第三の馬生」に該当し、I氏の認識は乗用馬や繁殖への使役変更も含める「第二の馬生」に該当することが分かる。確かにいずれの馬生の段階も「引退馬」ではあるが、養老牧場当事者にとっては、第二段階と第三段階では意味付けが大きく異なる。なぜなら殆どの養老牧場では引退馬には乗馬をさせないからである。例えば、A牧場は「散々人を乗せてきたのだから、人のために生きるのではなくて自分のために生きて欲しい」（2018/12/3）と語り、引退馬に乗馬をさせない方針を持っている。B牧場も若馬で引退したならば乗用馬としての活用も考えているが、ある程度の年齢になれば乗用馬の役目をやめさせる予定である。同様にC牧場も会員が来訪しても乗馬はさせない。このように引退馬という存在をどのように解釈するかについて、養老牧場当事者・引退馬協会と馬産業当事者との間に見解の相違が生じていることが分かる。

二つ目は、数多くいる引退馬をどのような基準で選別し、掲揚するかについてである。引退馬協会N氏は、戦前の日本に膨大な数の軍馬がいたことを例に出し、それと比較して少ない競走馬の生産頭数であれば全頭の余生を看ることが出来るのではないかと提案する。反対にI氏はこうした提案に否定的な立場を示す。現状の競走馬産業の構造を踏まえ、全頭の余生を見るのは不可能であるとし、「重賞勝ち馬」や「ファンの多い競走馬」として狭い範囲に限定することで、掲揚する引退馬を決定する以外に方法はないという認識が読み取れる。I氏のこうした主張と同様に、他の養老牧場も同様の基準や掲揚方針を示して運営している。例えば、土佐黒潮牧場の「重賞勝ち馬」や「愛着のある馬」、渡辺牧場やB牧場などの「自らが生産、世話した馬」であるなど、ある一定の基準を設けながら引退馬の選別を行っている。つまり、個々の養老牧場の限られた運営資金と牧場スペースを考慮しなければ、運営が成り立たない状況があるからである。

このように「引退馬の余生」という単一の問題意識を抱えながら、二つの部分で認識のギャップが生じている。

### 3-3 本章のまとめ 社会運動としての側面

引退馬保護運動を特徴付けるものとして、2つの観点が挙げられる。

1つ目は、当事者のこれまでの人生における経験や感情が牧場設立のきっかけとなり、かつそれらが多様な特徴を持つ牧場を生み出す要因となっていることだ。関(1999)は織田が浜埋立反対運動の分析の中で、運動の原動力は自然保護を抽象的・客観的事物と捉えて成立するのではなく、身体的で具体的な経験によって培われるとした。即ち、特定の地域に限定された反公害運動や住民運動などがそうであるように、その特定の「場」での経験が活動家の運動にきっかけを与え、影響する。同様に競走馬生産の全国の91%を占める北海道日高に参入した当事者達は、日高という「場」における経験を通して運動を形成し、様々な形で牧場を成立させていくのである。

a氏は他養老牧場の廃業を知り、行き場を失った引退馬に初めて直面したことが契機となり、牧場の設立に動き出す。殺処分が「非道德的」であるという今まで抱いてきた思いが、これがきっかけとなって具現化していくのである。b氏は何も知らない状態から馬産業に参入し、競走馬の殺処分を経験することで、そこで初めて問題意識を形成する。またc氏は養老牧場設立のために、他の養老牧場を手伝うことになるが、その牧場が廃業することでU氏が牧場の引退馬を引き継ぐ形で牧場を始める。いずれの当事者も、これまで無縁だった北海道の馬産業に「よそ者<sup>32)</sup>」として参入することで、設立のきっかけとなる経験を得ていくのである。彼らが地域にしがらみのない「よそ者」であったことによって、これまで馬産業者が意図的に意識せずにしてきた「引退馬の存在」を表立って顕在化させる役割を果たしているのだ。

そして富永(2014)が指摘するように、こうした当事者の職業生活、趣味、嗜好といった「日常」における経験や感情の積み重ねは、従来の社会運動を指す「出来事」としての養老牧場の運営にも反映されている。例えばb氏は馬産業に従事していた頃の「自ら世話した繁殖牝馬」のみと限定し、「誰かの思い入れのある馬は受け入れない」としているが、それは過去の支援者との仲違いや交流のある養老牧場のトラブルを自省的に捉えているからである。また、a氏は自身が競馬ファンであったことが、競馬ファンの多い会員層の心情の理解に役立ち、結果として牧場の方針を形作る。このように個人の「こだわり」や個々の牧場の「しきたり」(富永 2014)が多様な特色を持つ牧場を成立させているのだ。

---

<sup>32)</sup> 関(1999)は鬼頭(1996)に倣い「よそ者」の定義を明らかにしていないが、「地元」との対義語で使っている。

2つ目は、地域馬産業従事者、養老牧場、家族、支援者との緩やかなネットワーク<sup>33</sup>の存在が運動の継続を促している点が挙げられる。

まず緩やかなネットワークには、相互行為<sup>34</sup>に分類できる養老牧場同士、馬産業者×養老牧場、家族×養老牧場と互酬的關係<sup>35</sup>である養老牧場×会員層の二種類の組み合わせに分類できる。養老牧場同士の相互行為では、A牧場と引退馬協会が主宰しJRAへの政策提言を行う引退馬連絡会が存在するが、それ以外に養老牧場が集合的に加盟している組織は存在せず、個々の牧場が繋がっているだけである。C牧場も援助を受けた引退馬協会と密接な関係にあるわけではない。同様に馬産業者×養老牧場も敵対しているわけではなく、余った牧草を譲る、従事していた生産牧場との不定期の世間話など引退馬保護運動よりも養老牧場当事者が地域との信頼関係の構築に重きを置いているように思われる。またa,b両氏の夫は共に馬産業従事者であるが、両氏の活動に理解は示すが、馬産業を本業にしていることには変わりはない。

同様に養老牧場×会員層の互酬的關係もまた緩やかな繋がりである。会員全員が引退馬の処分に問題意識を抱えているわけでもなく、毎月の会費を払えば如何なるスタンスでもいいのである。つまり養老牧場は会員のために定期的に馬の状態を報告し、会員が馬と触れ合うとなれば喜んで迎え入れる、会員もそうした楽しいひとときを少しでも長く過ごすために会費を毎月払う。このように旧来の社会運動が掲げた代表制やヒエラルキー的構造を持つ組織形態ではなく、お互いが持つ財（お金と馬）を交換し合う緩い繋がりでは養老牧場は保たれているのである。

こうした緩やかなネットワークで繋がった養老牧場当事者、馬産業従事者や支援者が一箇所に集まる機会となったのが、2014年の引退馬ホースサミットであった。このサミットがきっかけとなって、JRAによる養老牧場に対する助成金制度の施行が始まったが、彼らの緩い繋がりには、問題意識の細部で噛み合わない部分を露呈したのである。

---

<sup>33</sup> 朴はネットワークを「コンテクストを共有している自主的な個々人、あるいはユニット同士が自律的につながる分権的かつ緩やかな協働システム」とする（朴 1999 p29）

<sup>34</sup> 朴によれば、自由に繋がって広がっているネットワークである（朴 1999 p4）

<sup>35</sup> 濱西（2006）はLETS（地域共有通貨運動）の組織形態が互酬的關係であることを明らかにした。

## 第四章 単独化される引退馬達 当事者の語りから

本章では、養老牧場の当事者達と引退馬の関係性について記していく。自ら育てた競走馬との再会から、普段の接し方、そして高齢馬特有の病気や怪我、死への向き合い方を通して、当事者達にとって引退馬が単独化、つまりかけがえのない存在となっていく過程を追う。

### 4-1 引退馬との巡り合わせ

養老牧場の中には、本来生産者であった者が養老牧場に転身するケースが存在する。一方で生産した競走馬が引退し、自らの養老牧場で繋養しようとする時、その所在を特定する作業は非常に難しい。競走馬は経済動物としてのプロセスの中で所在を転々としながら、経済的利潤が維持より下回る時まで、絶え間なく消費サイクルを循環し続けるためだ。この状況を表すように日高の馬産従事者に伝わる独特の言い回しが存在する。生産者は馬の発情期がきて、子宮が精子を受け入れる状況になることを「卵がおがった」（卵が育った）と表現する。馬は哺乳類ではないが、何故か昔からの日高の生産者の日常の中では、命を宿すことは卵であるということになっている。馬の馬生は目まぐるしく変わり、生まれたところから死ぬまで同じところに居られる馬はごく一部である。そうして卵のように転がり続ける競走馬が引退馬として馬生を全うする事になった数少ない事例と共に、そうした馬と巡り合い、共に生きる当事者の語りを明らかにする。

A 牧場で繋養されているアチャティーは競走馬としてレースに出たのはわずか8ヶ月間であり、4戦しか経験していない。デビュー戦も最下位でゴールするなど結果を出せず、処分対象の馬であった。その後アチャティーは引退し、所在不明になるが、a氏が必死に探し出し、最終的に肥育場で発見された経緯を持つ。

アチャティーの本来の競走馬としての名前はコスモランナウェイであるが、育成牧場のオーナーや厩務員が気に入ってアチャティーと名付けて可愛がるようになる。競走馬としての期間が短かったことから、一年以上の育成牧場での期間で名付けられたアチャティーの方が定着してしまったため、今日までこの名前が親しまれているのだ。このように競走馬としては「駄馬」であったが、多くの関係者に愛され支えられた馬であった。また育成牧場オーナーが亡くなり、その思いを引き継ぐためにも、a氏はアチャティーを探し出すことに決めたのであった。アチャティーへの思いをこう語る。

「皆が期待してた馬で、皆が可愛がってくれたのに、ここで肉にしてたまるものか！と思って。(中略) こんな馬でも気にかけてくれる人もたくさんいるわけ。未勝利馬で結果を出していない馬でも生きる権利があるんだっていうことを、私はこの馬を通して分かって欲しかったから引き取った」 (2019/3/25)

最初に得たのは、アチャティーが肥育場に流れている情報だった。a氏は早速滋賀県の肥育場に譲って欲しいということ伝える。当然、肥育場関係者も既にアチャティーを肥育させている途中であり、損失が出るため頑なに譲ろうとしなかった。そこでアチャティーの調教師と馬主に頼み、肥育場側に返して欲しい旨を代わりに伝えてもらうことになった。馬産業の中でも明確に上下関係が存在する。馬主が最上層であり、その次に調教師、騎手が置かれ、最下層が馬肉生産関係者であるという階層関係が存在するのだ。このようにオーナーや調教師に言われると断ることは出来ない。結局肥育場側の言い値の値段で譲り受けることになった。最終的に日高まで運ぶ馬運車代も含めて10万円<sup>36</sup>で交渉成立となった。

肥育場側には「この小娘が」というような文句も散々に言われたという。そうした当時のやり取りは鮮明に覚えている。

「自分の生産馬なのになんで返してもらえないの、うちが産ませたんだよ、みたいな話をし  
てね。(中略) 肥育場の人にも、違う馬(馬運車に)載せたらお金も払わないしって私も脅  
したからね。馬の名前も何も無いんだもん、証拠が。一切合切まとめて(多くの馬が肥育場  
に居るから)」 (2019/3/25)

経済動物である競走馬が肥育場のような消費サイクルにいる段階では、減多に助け出す事は出来ない。a氏もこのように強気の態度で出ないと助けられないという思いがあった。

アチャティーは現在でもM氏が個人的にお金を出す形で面倒を見ている。

B牧場は、自らが馬産業従事者として働いた時に世話した繁殖牝馬のみを繋養する方針を立てている。ここで記すホーネットピラス、シャイニングピサ、シャドウファイルもb氏が面倒をみた馬達である。

ホーネットピラスはb氏が勤めていた坂東牧場で24歳まで繁殖牝馬をしていた馬である。現在はよく懐いているが、現役時代のホーネットピラスは触ろうとすると回し蹴りが飛ぶぐらい神経質な馬であった。そのため誰も触らないためか、引き取った時には顔まで皮膚病になった酷い状態であったという。それでもb氏にとっては、逆に興味を惹かれた馬だった。

「最初出会った時、この子どうしたのっていう感じの馬だったんですよね。ただ私そういう子ほど気になっちゃうたちなので、何とか触れるようになりたいって思って、すごい時間かけて、それで慣れていった馬だったんですよ。(中略) だからそういう馬だったのが、この人大丈夫って思ってくれたら、すごく信頼してくれるようになったんですよね。」

(2019/5/19)

---

<sup>36</sup> 当時の肥育馬の相場は1頭3万円ほどであったが、現在では馬肉需要の増加により取引価格は上昇している。

この経験から、どんな馬とでも時間をかければ信頼関係を築けるようになると身をもって教えてくれた印象深い馬だった。

ホーネットピアスの次に入ってきたシャドウファイルは18歳の引退馬である。興奮すると旋回引きがひどくなってしまう癖のある馬だ。この馬もまたb氏が坂東牧場でお世話をしていた馬であった。坂東牧場で働いていた頃、シャドウファイルは今年が最後だと知らされていた。しかし引退馬保護の影響から処分し辛くなった馬主は、他の牧場で改めて繁殖牝馬として活用する事で生かす事になる。そこでもb氏は「いつかご縁があったら」と連絡し、引き取る旨も伝えていた。そして移転先の牧場の社長も癌により牧場自体の規模を縮小した事で、急遽B牧場に来る事が決まった。この時点で半ば諦めていたこともあって、当時非常に喜んだのを覚えている。

「この子は旋回癖あるし、うちの母や主人にも引き取るのを反対された馬なんですけど、私が強引に引き取った馬なんで大分主人はむくれてましたけど・・・ただ性格が誰よりも大人しくて可愛くて。ちょっと頭が悪いだけなんです(笑)私は彼女(シャドウファイル)がいてくれて本当に和むんですよね」 (2019/5/19)

そしてB牧場で一番新入りなのが、シャイニングピサという馬である。この馬も坂東牧場でb氏が上がり馬として初子の頃から育てていた馬だ。シャイニングピサはアメリカ産の珍しい血統であるが、中央競馬で一勝もせず地味な競走馬である。レース引退後の繁殖牝馬としても小さい産駒しか生まないため、いつ処分されてもおかしくない状況であった。

シャイニングピサとの再会は偶然の出来事であった。友人が牧場主と結婚する事になった際、たまたま厩舎を見学させてもらったところ、繁殖牝馬リストの中に見覚えのある名前が書いてあったそうだ。放牧地で改めて自分の目で確認すると、間違いなく坂東牧場でお世話をしていたシャイニングピサであった。

「凄い派手な顔なので、凄い印象に残ってて。間違いなくこの馬だねってなって。本当に皆ちりじりになるんだなあって思いました。」 (2019/5/19)

競走馬の所在が頻繁に変わることは原体験とともに理解していたが、こうして実感させられたのは初めてだった。その後定期的にシャイニングピサに会いに行くことになるが、その度に牧場関係者には「どうしてこの馬に感動しているのか」と不思議がられていたという。

その後馬房の更新に伴い、居場所の無くなったシャイニングピサをついに引き取り、今に至る。

## 4-2 病気そして死と向き合う

養老牧場の性質上、日常的に高齢馬達の病気や死といった出来事に遭遇<sup>37</sup>する。一方でこれまで当たり前でなかった高齢馬の世話は、想定外の事態と直面することが多々ある。そしてどうしても治療出来ない場合、当事者はどう向き合ってきたのであろうか。最後まで馬生を全うさせる役目を負った養老牧場の当事者にとって、どのような最後が馬にとって幸せかどうか、答えを持つ当事者は少ない。

A 牧場に 2013 年にやってきたワコーチカコは、僅か三年後の 2016 年に 26 歳で亡くなっている。死因は親のリベリアと同じく腸捻転である。腸捻転は事前に判断することが出来ない。何らかの原因によって腸が捻れ、徐々に腐っていく。対策として柔らかいものを食べさせたりする、身体の体勢を動かすなどがあるが、根本的な解決にはなっていないのが現状である。手術で捩れを解消することはできるが、一度ついた捩れは戻りにくい。そのため、生存率は 20%以下である。

症状が明らかになった時点で、ワコーチカコに全身麻酔を施し治療するのは危険であり、お腹を開く前に息絶えてしまう恐れがあった。最終的にワコーチカコは安楽死という形で馬生を終えることになる。A 牧場でこれまで安楽死で馬生を終えた馬はワコーチカコ含めて二頭のみであった。腸捻転のように苦しみながら最後を迎える馬が少なかったことも大きいが、決して安楽死を否定しているわけではない。だが、それでも安楽死処分を簡単に行うわけにはいかない理由がある。

「もちろん苦しんだら、楽にしてあげたいと思うんですよ。でもやっぱり私たちの目的っていうのは（馬には）自ら引いた馬生であって欲しいんですよ。注射を打ったってことは、人の手に委ねたことになるじゃないですか。じゃなくて人間と同じように自分で馬生を決めて欲しい。だから、なるべく注射は打たない。よっぽどじゃない限りね」

(2018/12/1)

---

<sup>37</sup> <sup>37</sup>動物の世界では不治の病が未だに多く、特に馬の場合は治療法が確立していない症例が多い。若馬の治療法以上に、高齢馬へのケアも当然に発展途上である。A 牧場もこれまでも何度か高齢馬のケアに対する研修を開いているが、対処法は経験の積み重ねでしか得られていないため、完全に確立したものを提供できていないのが現状である。一方で高齢馬の疾病に関して新たな取り組みもされている。A 牧場は 8 年前から毎年栃木県にある JRA 管轄の競走馬総合研究所<sup>37</sup>の大村獣医と協力し、高齢馬の心電図を撮影している。これにより高齢馬の心機能がどのような変化を遂げていくのかを図り、心房細動が見つかる際の数値の目安がどのくらいであるのかを検証している。a 氏は研究材料として牧場の馬を提供している。また、高熱や怪しいと感じた時には、解熱だけで済ませず血液検査でのヘモグロビンの数値の変化を必ず獣医と共有することになっているという。これらの取り組みにより高齢馬の身体機能については少しずつであるが、明らかにされつつある。

現役の競走馬でも最初から腸捻転のような病状を判断するのは獣医でも不可能に近く、むしろ経済動物である競争馬にそのような症例を判断すること自体が損失を生み出すため、あえて避けようとする。腸捻転は自然と治る可能性も残されているからである。

グランリーオは難病にかかり、奇跡的に助かった馬の一頭である。16歳の時に爪に腫瘍ができ爪底が腐ってしまう蹄葉炎ではないかと疑われた。しかし、蹄葉炎とは少し違う症状であることに装蹄師が気づき、獣医に診てもらうことになった。その時初めて蹄葉炎ではなく、木の根っこのようなものが爪の先から足までに進行してしまう難病であることがわかった。ここまで酷くなったのは初めてであり、当時日高でも4件ほどしかない珍しい症例であった。原因も分からず、悪化すればいずれ歩けなくなる恐れもあった。

「手術は保険が効かないので、すごい高額になる。でも助けてあげたい。でもほっといたら死ぬ。ずっとその繰り返しで」 (2018/12/3)

a氏やF議員は熟考の末、ホームページにてグランリーオを紹介し手術代を集めることになった。手術費は4~50万円であったが、最終的に会員の後押しにより200万近く集めることが出来た。グランリーオの手術は長時間に及びものだった。

「人間と同じでガラス張りで手術室から見えるんですよ。ずっとそれを私たち、5時間見てるわけですけど、いやこんな手術しなきゃいけなくて可哀想だなって」 (2018/12/3)

結果的に腫瘍を綺麗に取り除くことに成功し、当時グランリーオの大ファンだった会員は泣きながら感謝を伝えてきたという。また馬主だった人物からも「よく決断してくれた」とお礼状を貰っている。その後の8ヶ月の治療期間では、取り除いた部分に蓋をするように、爪が生えるまで革の補助器具を履かせる。これは自分の糞を踏んでしまうことで細菌が入らないようにするためである。これを毎日のように馬の重い足を持ち上げながら、靴を脱がせ消毒を行うのが大変辛いものであったとa氏は振り返る。グランリーオ自身も爪を全て剥がされ肉が剥き出しになった状態になりながら厩舎に戻らなければいけないため辛かったのか、涙を流していた。通常馬は滅多に涙を流さない。今では完治しており、元気に暮らしている。

もう一頭a氏にはどうしても忘れられない馬がいるという。アサヒエンペラー<sup>38</sup>という馬である。アサヒエンペラーは20歳の時にA牧場に繋養され、2018年3月に35歳で亡く

---

<sup>38</sup> 神山という国内最高齢記録の35歳で亡くなった伝説の競争馬がいたが、アサヒエンペラーは神山と深い繋がりがある。神山が最初に倒れた時に輸血をして助けたのが、当時まだ若い種馬であったアサヒエンペラーであった。このような事態に大人しく対応できるよ

なった。人間でいえば115歳を超える年齢である。強心臓でどっしりとしており、また人間に従順で悪さをしない穏やかな馬であったという。

競走馬引退後は群馬県の嬭恋村乗馬クラブにて乗用馬として活躍していたが、20歳と高齢になり乗馬ができなくなったため、A牧場に繋養されることになった。穏やかな性格であったことが幸いして、どの馬とも仲良くできたが、仲間の馬が老衰で死んでいき、アサヒエンペラーが年長になっていく。同い年で一緒にG1レースにも出ていたシンチェストも29歳の時に亡くなってしまう。

30歳を過ぎ、長年乗馬を行なっていたため足の古傷が痛みますが、それでも元気すぎるほどであった。当時馬が30歳を超えることは非常に珍しかったため、これからも長生きさせてあげたいというのが共通の願いであった。それでも31歳を過ぎた辺りから、足の悪化が進み、そのうち耳目も機能しなくなっていく。放牧地の奥に行ってしまう、呼んでも戻ってこないということを何度も繰り返すようになった。そのうち倒れる度にもうダメだと覚悟し、獣医を呼ぶことが何度も続いた。しかし、その度に毎回自分で立ち上がり元気になるため、倒れてもまたいつかアサヒエンペラーは立ち上がるのではないかと期待をしまっていたという。最大で8時間も見守っていたこともある。

また、身体の不調とは別にアサヒエンペラーの性格にも変化が見られるようになる。自分の思い通りにいかないことが増え、頑固になりヘソを曲げることが多くなった。雨が降ると途中で自らUターンして、馬小屋に戻るようになった。そのせいで小屋の掃除ができずアサヒエンペラーに多くの時間を割いたり、夏の放牧中にアブに刺されたせいで、怒って勝手に小屋に戻ってしまったりなどをするようになった。今まで多くの高齢馬を見てきたa氏でも当時を振り返れば辛いものだったようだ。

「(アサヒエンペラーには) すっごい苦勞したの、こっちまで身体おかしくなるぐらい振り回された馬だった」 (2018/12/3)

このように四六時中アサヒエンペラーのわがままに付き合わされる日々が約4年続く。最終的に自力で起き上がれなくなり、心不全で亡くなった。これまで多くの馬の最後を見届けてきたa氏だが、馬の死に涙を流したのは初めてだったという。

「私もうちのスタッフも馬が死んだ時に泣かないって決めてるんですよ。だって、この子達幸せだったわけじゃないですか。(中略) 全うしたんだから良かったね、で送り出そうと、それがルールですけど、(アサヒエンペラーの時) 初めて泣きました。寂しさからじ

---

うな、頭の良い馬でもあったという。しかし、レースには恵まれずダービー3着、天皇賞2着などを繰り返す、絶対人気にはなれるが勝ちきれない馬であったため、競走馬ファンからは無冠の帝王と呼ばれた。ファンの人気も高かったが、足を故障して引退した。

やなくてホッとしたのかも。私たちも解放される。馬自身も楽になる。私たちはなんか、良かったねって思って涙が出たっていう（笑）」（2018/12/3）

a氏は大往生したアサヒエンペラーに後悔はしていない。「してあげられることは全てやった」という自負があるからである。

一方でアサヒエンペラーとは違い、早い段階で病気に気付いてあげられず後悔したまま亡くしてしまった馬もあった。タヤスレミグランという馬である。人に従順であるが、とても個性のある馬であった。アサヒエンペラーと同じく心臓が強く、現役の競走馬と遜色がない程であった。毎年の心電図でも特に結果が良かったのがタヤスレミグランであり、一番長生きするだろうと予想していた馬であった。静内で生産され、見た目は非常に可愛い顔をした馬であったという。目はクリッとしており、あまりサラブレッドらしくない、コロツとした丸みを帯びた体型であった。また冬毛も多くさながら熊のような見た目であったそうだ。そして同じ馬主出身でA牧場に繋養されていたタヤスアゲインとは牡馬同士であるのにも関わらず、常に一緒に行動するなど仲が良すぎる程であった。このように人懐こく個性ある性格と愛くるしい見た目から、会員からも「レミポン」と呼ばれる程、人気で可愛がられていた。競走馬としては無名ではあるものの、中央競馬の取材にも特集されたぐらいである。a氏の口から出るタヤスレミグランのエピソードは絶えない。

「(前略) 本当に愛嬌のある、可愛い馬だったんです。なんか私達が接する時も動物園にいるような感覚だった。病気もしないしね」（2018/12/1）

タヤスレミグランが24歳の時、徐々に痩せていくのに不安に感じ、血液検査を行った結果、リンパ癌を発症していることがわかる。白血球の数値がなかなか上がっていかぬことで起きる病気であるが、気付いた時にはもう既に手遅れであった。それからわずか数日にしてタヤスレミグランは25歳という比較的若くして亡くなることになる。リンパ癌は薬も治療法も確立していない。しかし、a氏はもう少し早く気付いてあげて、美味しいものでもたくさん食べさせてあげれば良かったと今でも後悔している。常に一緒に行動していたタヤスアゲインにも変化が見られた。一緒に行動している馬の多くは、どちらか片方が先に居なくなってしまった場合、心不全などで連鎖することが多い。馬の仲が良ければ良いほど連鎖性は強くなり、相方も弱ってしまう。ずっと一緒にいることでお互いに頼ってしまい、ペアで放牧している馬は管理が難しいとされている。A牧場にとってもそれだけは避けなければいけないことであり、タヤスレミグランが亡くなる1ヶ月前にタヤスアゲインを引き離した。最初のうちは、タヤスアゲインもチラチラと気にして、レミグランのいる方の放牧地の方を向いて鳴いたりしていたが、そのうち新たな仲間を作っているうちに自然と離れていったという。

「馬ってね、基本的に生きてこそだと思っんですよ。どんな状態でも生きてなかったら幸せに巡り合うこともないし、命を落としたらそれで終わりじゃないですか。アゲインを生かすためには何かを犠牲にするしかないんですよ。その何かの犠牲がレミグランっていう相方を失うっていうことを受け入れさせないといけない。それは、そういうことをやっていくことも私たちの仕事かな、生かすために」 (2018/12/1)

a氏自身もやりきれない葛藤があったことが分かる。同時に牧場の存続、会員の馬への愛着、期待を背負った養老牧場には、時に厳しい判断をしなければいけない。

A牧場でこれまで亡くなった引退馬は火葬後、牧場敷地内で埋葬されている。通常日高地域では馬は火葬後処分されるが、遺骨を引き取り、一頭一頭の名前を刻んだ墓石を立てることで供養している。

B牧場は一頭の死しか経験していないが、どのように弔うのが正解なのか答えを見いだせていない。その一頭であるアッシュアッパーは、処分場で産業廃棄物扱いとして処分された。牧場の協力者であり獣医でもある夫も、馬のために埋葬や墓石までする必要のあるかと懐疑的に考えているからである。

「出来れば埋めてあげたいというのがありますね。(中略) 私は埋められるのがベストだけど、でも生きている間にどれだけ幸せに過ごせたかが一番だと思っているので、亡くなった後の事は、たとえコンクリートに混ぜられた(産業廃棄物)としても、まああれかな(しょうがない) と思っているんですけど」 (2019/5/16)

馬には不治の病が多い中で、養老牧場は常に引退馬の死と隣り合わせの状況にある。この時どうしても助からないと想定される場合の選択肢として安楽死処分が考えられる。B牧場は2016年に牧場を開設して以降、一頭の病死しか経験していないが、今後引退馬の死とは必ず向き合うことになる。その時判断に迫られた際には安楽死処分も視野に入れている。ただし多くの生産育成牧場で行われているような経費削減のために、麻酔薬を打たずにいきなり注射を打ち安楽死させるようなことはしたくないと語る。B氏は、必ず麻酔を行い眠らせてから安楽死させるのが養老牧場としての最低限の役割だと考えているからである。

C牧場もこれまで多くの馬の最後を見届けてきたが、今でも自らの手で安楽死の選択をしたことに対して悩む事がある。スターディビジョンはc氏がオーシャンファームから引き入れた引退馬である。オーシャンファームにおいてハミより負担の強いタイロクで制御されていたことから、スターディビジョンの足の負担は大きかった。そうして一年かけて足の障害を完治させたが、次にc氏を悩ませたのは原因不明の病気であった。結局原因が分からないまま突然倒れ、そのまま起き上がることはなかった。基本的に倒れたままにす

ると床ずれによる出血や足の骨が変形骨折するため、頻繁に体位を変えてあげなければいけない。高齢の浦野さんには他の手助けがないと1人ではどうしても難しいことだった。

c氏は悩みながらも、最終的に薬殺することになった。今振り返ってみても、もっと生かしたのではないかという思いが頭をよぎり、その安楽死の判断に後悔し、反省しているという。ただ一方で、その苦しみ方を見続けたことで、無理やり生かすのではなく楽にさせてあげたという当時の思いが交錯しているようだ。

#### 4-3 本章のまとめ 単独化としての側面

経済動物である競走馬がいついかなる状況で商品から単独化に至るのかを当事者の語りを通して微視的に分析するのが、本節の目的である。そしてここで明らかになるのは、第一に単独化が非連続的に二度行われる事、第二に馬の身体的特徴や行動、性格が当事者の記憶（それに基づいた語り）を形成し、馬をかけがえのない存在として捉える要素となっている事である。

まず1度目の単独化は、馬が「第一の馬生」の前段階、つまり現役の競走馬としての役割を保持している段階である。つまり、その時点で競走馬産業に従事していた当事者と競走馬との関係性が発端となって1度目の単独化が引き起こされた。A牧場a氏、B牧場b氏はそれまで全く関わりのなかった競走馬産業へと参入し、競走馬の生産から育成を担う中で感じた、いずれ訪れる殺処分への違和感を筆者に言語化した。ただし、こうした違和感は養老牧場当事者だけのものではない。これまで生産育成に携わる馬産業従事者にも認識されながら、経済動物としての利用価値を追求していかなければいけない現状の中で、引退馬の余生について語ることは避けられ、関係者の中で問題として表面化する事がなかっただけである。大月は、引退馬が殺処分される際に「食肉」や「屠殺」といった直接的な言葉を使用せず、「芝浦行き」など加工場の所在地で表現し、産業従事者にとって競走馬の殺処分が後ろめたいものであることを明らかにしている。(大月 1990 p236) こうした慣行に対して金澤は、「消費され続ける競走馬という存在が商品として交換不可能になる状況を避けるための戦略」と解釈する。(金澤 2016 p98) また風戸は、モンゴルにおける牧民と家畜の関係性の事例において、不特定多数の家畜に対する感情移入を防ぐため、名前の付与をしないなどの文化的慣行の存在を明らかにした。(風戸 2006) 同様の事例は競走馬産業でも行われており、生産育成牧場では名前を付与せず、産駒を母馬の名称と番号で識別する。

これに対して、実際に当事者は競走馬を経済動物とみなすだけでなく、愛着を持った存在として単独化していくのである。具体的には、アチャティーが育成牧場主に愛称を付与され大切にされていたことで、それに影響されたa氏もまたアチャティーを特別な存在として捉えることを引き継ぐ。b氏は経済動物として不向きな性格や行動を備える競走馬でも可愛がり、愛着を持って接する。また「自らが世話した繁殖牝馬」を養老牧場で引き取るというB牧場の運営方針も、馬産業に従事していた時点で、競走馬がかけがえのない対象として存

在していた事が読み取れる。しかし彼らが単独化しても、競走馬が馬産業内で永続的に単独化されるとは限らない。アチャティーは競走馬を引退後、肥育場で食肉としての経済価値を付与され、またシャイニングピサは繁殖牝馬として別の牧場に転換されるなど、改めて商品として認識される。コピトフは奴隷の事例を基にしながら、時間の経過に伴って対象が商品化されたり単独化されたりを繰り返す現象を具体的に指摘している。(Kopytoff 1986 p76)そして改めて当事者は、商品化されてしまった無数の競走馬の中から馬の身体的特徴や性格の記憶を手掛かりに、探し出す作業を行う。このように競走馬も馬生の過程で商品化と単独化を繰り返し、最終的に当事者が引き取り養老牧場で掲揚されることで、2度目の単独化を果たすことになるのである。

「商品化と単独化の志向性の中で揺れ動く「人生」と「馬生」の流動的な関係性」  
(金澤 2016 p99)

馬生における2度目の単独化とは、養老牧場での繋養過程で起きる。言い換えれば、「第三の馬生」の段階である。この過程において初めて、人間の都合で経済動物として馬を利用するのではなく、馬生を尊重した共同生活へ移行する。そうした引退馬との日常は、病気や死などのトラブルの連続であり、当事者の記憶にはっきりと爪痕を残す。特に引退馬の死や助からない状態に至った時、多くの当事者はその処置に悩み、後悔や反省など様々な感情を起伏させるのだ。例えば馬の病気の対処法の一つである安楽死処置は、生産育成牧場での馬の自然死(突然死)と同程度に多い死因に挙げられるが、馬生の尊重を果たす役割を持つ養老牧場にとっては、馬生を人間の手で遮断する作業として認識され、安易に処置を施す事が出来なくなる。また死後の対応にもこれまで競走馬にされてこなかった対応がされる例もみた。本来畜産で一般的に行われる火葬処理ではなく、あえて埋葬し墓標を立てるのは、当事者の中で特別な意味付けがなされているための行為であると考えられる。こうした馬への愛着やそれに伴う弔いの儀式は第二次世界大戦前後の日本でも行われている例が報告されている。

「馬を軍に供出する農民にとっては、供出は家族を兵役に送り出すのと同じようなものであった。男子を兵隊として送り出すことができず肩身が狭いと感じていた一家にとって、馬が出征するのは身代わりとして意識され、馬に感謝する気持ちを表さずにはおられなかった。馬は出征兵士と同じように、神社で「武運長久」の祝詞を受けた後、餅と赤飯を食べさせてもらい、きれいに飾られて駅まで連れていかれ、日の丸を振り万歳三唱で送り出された。中には、武運長久と書かれた髪を紙繕りにして、鬘に固く結び付けられている馬もいた。」(久慈 1990 p368)

37年から45年までの8年間に徴発された馬は60~70万頭とされているが、そのうち全国

に 950 前後ある愛馬碑の殆どが農民によって自主的に建立されたものである。そしてその愛馬碑に納められたのは、兵士が切り取って持ち帰った鬣であり、旧飼主である農民に弔って供養するよう頼んだという。(久慈 1990 p382) このように軍馬と競走馬は身体的特徴から経済的利用価値まで異なる性質を持つが、それでも商品以外の多義的な意味を持つ存在として共通している。

風戸は生き物である商品がこのように多義的な意味を帯びる要因を二つ挙げている。一つは時間の経過で生き物の身体性が変化し、同時に人間との関係性も変化する。二つ目はそうした身体性の特徴や変化が人間に強く影響するとしている。(風戸 2006 pp48-49) この視点は本研究にも当てはまる。競走馬は年齢(=時間)とともに病気や怪我に頻繁に直面し、経済動物として様々な用途に転換されることでその命を繋ぐ。同時にその個体の価値が商品となるのかそれとも唯一無二のかけがえのない存在となるのかは転換先の人間との関係性によって変化していく。そして最終的に養老牧場で繋養されることで、引退馬の身体的特徴や性格が当事者の記憶の束となって単独化され、語りの中に現れるのである。

## 結論

### 1-1 全体の考察

第一章では、競走馬産業の歴史的変遷と特殊な閉鎖市場の形成を明らかにしながら、経済動物としての競走馬が如何に扱われてきているか、そして引退馬の発生と現状について明らかにした。戦後の日高における競走馬産業は、他農業分野から馬産に転向した生産者の割合が多く、そうした家族経営の生産者を保護する制度慣行の充実が競走馬産業全体の発展を促していく。しかしながら、1990年代の外国産馬のレース開放と競馬不況が、マーケットブリーディング特有の生産機能しか持たない零細家族経営牧場の大量廃業に追い込んだ。これにより大規模企業的経営牧場の寡占状態やコンサイナーの出現など産業構造が変化すると同時に、過剰生産や殺処分等の競走馬の命を巡る問題が明るみに出るのである。こうした問題に行動を起こした当事者は、従来の競馬ファンや外部の動物愛護団体だけでなく、競走馬産業内部からも起こり、馬産業から養老牧場に転換する牧場が現れた。このように養老牧場の発生は、1990年代から2000年代にかけての産業構造の変革期に重なるものである。そして現在では、養老牧場の増加、当事者による引退馬保護運動の発信、国際的な動物福祉の流れを受け、JRAによる引退馬保護政策を決定させるに至る。

第二章では、引退馬保護運動の現場である養老牧場に焦点を当て、その設立事例や運営状況を通して、競走馬産業の延長線上にある養老牧場の実態を明らかにした。養老牧場の設立は、個人の様々な経験がきっかけとなる。そうした経験で得た動機をきっかけにして養老牧場設立を目指すのが、A牧場、B牧場共に養老牧場設立以前に競走馬産業に従事することで、引退馬の世話に関する技術的要素、馬産業内でのネットワークを獲得していく。一方でC牧場は馬産業に従事するのではなく、他養老牧場と関係性を持ち、また引退馬協会とも協力関係になることで、運営を進めている点で異なる。このように養老牧場が他馬産業や保護団体と繋がることで運営を成立させている一方で、実際の運営状況は厳しい。会員の会費や寄付が養老牧場の収入源となるが、引退馬の掲揚に伴う治療・薬代や飼料代の高騰が彼らを苦しめている現状が明らかになった。養老牧場は、地域社会の一員として馬産業の延長線上にあるのにも関わらず、利益の見込める経済活動して機能していないことが明らかになった。

第三章では、経験運動論的アプローチから当事者の経験、問題意識、人間関係に着目し、引退馬保護運動が周囲を巻き込みながら社会運動化していく過程をみた。第二章で明らかにしたように、経済的利益を見込んで養老牧場を設立したのではなく、第三章によって当事者の人生における経験や感情、問題意識が、養老牧場設立や引退馬保護運動に行動を向けるきっかけとなっていることが明らかになった。それは富永が指摘した「日常」における経験であり、そこでの経験が「出来事」である運動に多大な影響を与えているのである。同様に、北海道という「場」における会員、地域社会、馬産業、運動当事者同士と行った他者との交流もまた当事者の経験となり、牧場の運営方針に「こだわり」として反映されていることが明らかになった。

第四章では、養老牧場の当事者と引退馬の関係性が如何に作られてきたかについて微視的に分析し、当事者が引退馬を「単独化」する過程を明らかにした。当事者が競走馬と出会い、改めて再会する過程、そして養老牧場において引退馬の病気や死と向き合う過程の二つの側面を捉えることで、当事者が馬をかけがえのない存在として認識し、記憶する過程を言語化するのが第四章の役割である。ここで語られた二度の「単独化」は当事者と馬の関係を固定化し、それが牧場運営の動機の一つとなる。つまり「単独化」もまた当事者の人生における経験の一つであり、養老牧場設立をはじめとする引退馬保護運動が賛同者を集め社会運動化を促進する一要素となるものであったのである。

改めて、全体を俯瞰して引退馬保護運動の展開過程を捉える必要性がある。まず引退馬に関する問題意識の発生は、戦後に形成された競走馬産業の構造的問題に起因していた。構造的問題とは、生産特化型の中小零細牧場が産業構造の多数を占めている状況とそれに伴う競走馬の過剰生産である。1990年代以降の国際化と競馬不況による影響は、そうした中小零細牧場の多くを廃業に追い込みながらも、生き残った大規模牧場の寡占状態により過剰生産の問題は解決されることがなかった。こうした諸問題は社会に認知され、これまで見過ごされてきた競走馬の命を巡る問題は、競馬ファンといった外部者だけでなく、競走馬産業内部からも改善を促す声が上がったのである。養老牧場の発生は、競走馬の処分に関心を持った当事者達の一つの解決方法であった。現在において、養老牧場は競走馬産業を構成する産業主体の一部となったが、利潤を確保出来る牧場は僅かである。それでも養老牧場が現在まで成立しているのは、当事者達の人生における経験や感情の積み重ね、そして当事者と馬の関わりによって形成された「単独化」という二つの要因が引退馬保護運動の原動力となっているからである。

## 1-2 謝辞

本論文の執筆にあたり、3年という長きに渡り丁寧にご指導下さった指導教官の小熊英二先生に感謝致します。

また、全くの部外者である筆者を快く受け入れて下さった北海道の馬産業関係者の皆様にも厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。

### 1-3 参考文献

〔欧文文献〕

Kopytoff,Igor ,*The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process. In Arjan Appadurai ed. The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective* ,Cambridge University Press,1986,pp64-91

McDonald,Kevin,*From Solidarity to Fluidarity :Social Movements beyond Collective Identity-the Case of globalization conflicts*, Social Movement Studies 1 (2) pp100-134

〔和文文献〕

〔一次資料〕

農林水産省生産局畜産部競馬監督課 (2017)『平成 28 年馬関係資料』

農林水産省生産局畜産部競馬監督課 (2018)『平成 29 年馬関係資料』

農林水産省生産局畜産部競馬監督課 (2020)『馬産地をめぐる情勢』

〔二次資料〕

小山良太 (2004)『競走馬産業の形成と協同組合』日本経済評論社

小山良太 (2004)『馬資源を活用した地域産業クラスターの可能性』北海道開発協会 平成 16 年度研究助成論文サマリー

小山良太 (2001)『軽種馬生産における家族経営の存立と補完団体の機能』北海道大学 pp71-73

沼田尚也 (2008)『北海道における軽種馬山地の変化』地理学論集 No.83

岩崎徹 (2002)『競馬社会を見ると日本経済が見えてくる-国際化と馬産地の課題』源草社

岩崎徹 (2005)『馬産地 80 話 日高から見た日本競馬』北海道大学出版会

江面弘也 (2000)『サラブレッドビジネス』文春新書 pp125-128

富永京子 (2016)『社会運動のサブカルチャー化 G8 抗議運動の経験分析』せりか書房

金澤大 (2016)『馬生と人生のコンタクト・ゾーン 北海道の競走馬産業における人間と競走馬の関係』京都大学

デズモンドモリス (1989)『競馬の動物学』平凡社

近藤誠司 (2001)『ウマの動物学』東京大学出版会 p148

佐藤和夫 (2005)『軽種馬生産地の持つ多面的機能評価』農業経済研究第 77 巻第一号

佐藤衆介 (2009)『ヒトと動物の関係学 家畜の文化』岩波書店 pp256-277

- 菅豊 (2009) 『人と動物の日本史 動物と現代社会』
- 久慈勝男 (2016) 『日本人と馬の文化史』 pp365~406
- 風戸真里 (2006) 『商品世界からこぼれ出る家畜-社会主義および市場経済化期のモンゴル国における家畜の個性性と意味』人文學報 京都大学人文科学研究所
- 朴容寛 (1999) [新しい社会運動とネットワーク] 『社会運動研究の新動向』 pp1-26
- 関礼子 (1999) [織田が浜埋立反対運動をさせた「故郷」という関係] 『社会運動研究の新動向』 pp63-80
- 石川准 (1990) 『社会運動論の統合をめざして-理論と分析』成文堂 pp281-285
- Jan Niggemeier (2014) 『新しい社会運動の視点から見た日本の反原発運動』慶應大学
- 濱西栄司 (2008) 『集合的アイデンティティから経験運動へ』京都大学
- 濱西栄司 (2010) 『新しいグローバル運動の社会学-経験運動論とメカニズム』京都大学
- 打越綾子 (2016) 『日本の動物政策』ナカニシヤ出版 pp6-90、pp253-314

〔インターネット資料〕

<https://jbba.jp/data/statistics.html> (最終検索日：2020/10/21)

<http://www.jra.go.jp/> (最終検索日：2019/5/25)

<http://www.hidaka.pref.hokkaido.lg.jp/> (最終検索日：2019/5/25)

<http://www.town.hidaka.hokkaido.jp/> (最終検索日：2019/5/21)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%83%9E%E3%83%8E%E3%83%91%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%83%89> (最終検索日：2021/01/28)

<http://www.intaibaren.jp/pressrelease/index.html> (最終検索日：2021/1/28)